

# 粵語（広東語）教材史概観 ——日本国内刊行の市販教材を 対象として

吉川雅之

## 1. 前書き<sup>①</sup>

広東語は学術名を「<sup>えっご</sup>粵語」という<sup>②</sup>。主に中国華南の広東省中部から広西チワン壮族自治区中部にかけて分布する言語であるが、今日では広東省の首都広州ではなく香港のスタイルが国際的にその標準と見なされることが多い。また、20世紀末に中華人民共和国に返還されるまで英領であった香港とポルトガル領であった<sup>マカオ</sup>澳門では、「中文」という名称の下に事実上公用語として使用されてきた（吉川 1997、2019a: 160-163）<sup>③</sup>。

もともと中国華南に於いて権威的な地位に在った言語であることに加え、香

---

① 本論では粵語の音節について声母、韻母、韻尾といった中国語学の用語を用いる。

② 「粵語」とは地域方言や階級方言など各種変異まで包含した総体としての広東語を指す学術名である。日本では従来「広東語」という呼称が、広州・澳門・香港を頂点とした三角形、即ち珠江デルタを覆う粵語の方言群を意味するものとして使われてきた（吉川 2001: 2）。粵語は言語系統論ではシナ・チベット語族漢語派の一種と見なされるが、基層にタイ・カダイ語族の言語が存在したとする学説は現在では広く学界の支持を得ている。

③ 粵語の基本的な特徴については吉川（2001: 2-12、2022a: 12-15）を参照されたい。

港や澳門という日本人にとって馴染み深い都市で事実上公用語として機能してきたこと、そして海外の華人社会でリングフランカとして機能してきたこともあり、日本では学習の対象としてある程度の需要が存在してきた。その反映とすべきものが、外国語教材として刊行された粵語教材の多さであり、一国内で刊行された数として日本は世界に誇るものが有る。また、国内の幾つかの大学では粵語は選択科目として設けられており、在學生は第三外国語として学習することができる<sup>④</sup>。そこで、本論では日本国内で刊行された粵語教材を基礎資料として、その構成、発音表記などを比較し、史的発展を概観する（以下、特に断らない限り「教材」は粵語教材を指す）。そして最後に、粵語に特徴的な語彙が教材でどのように文字表記されてきたかについて述べる。粵語教材そのものの史的発展を論じる試みはこれまで行われてこなかった。本論が教材史研究の可能性を開く一助となることを願う。

本論では、外国語学習の補助という教材の役割に着目して論を進める。教材に記された文字・語・文には言語変化や言語変異に関わる情報が反映することが有るが<sup>⑤</sup>、本論ではその種の情報についての言及は最小限に留める。

## 2. 基礎資料とその分類

### 2.1. 基礎資料

本論の基礎資料は、日本語話者向けに日本国内（1895年から1945年までの台湾を含む）で商業出版物として刊行された図書形態の教材である<sup>⑥</sup>。本論で

---

④ 東京大学教養学部での開講およびその理念については楊・吉川・小野（2018: 106-108）で簡潔に述べられている。

⑤ 第二次世界大戦以前の欧米人の手に成る粵語教材を基礎資料とした研究では、主に言語変化や言語変異についての考察が展開されてきた。1990年代末期に本格的に始動したその潮流については吉川（2019b, 2019c）で解説されている。

⑥ 日本国外で日本語話者向けの粵語教材が刊行される機会は少ないが、頼玉華『日本人のための広東語』（デイリー共同ニュース, 1985年）、片岡新・李燕萍『拉埋

は主に3つの時期に分けて教材を考察するが、第一期（1938年から1944年まで）についての論述に多くの紙面を割く。紙幅の都合により、第二期（1955年から1968年まで）と第三期（1981年から）についての論述は簡潔に済ませる。

本論では第一期の教材にI、第二期の教材にII、第三期の教材にIIIで始まる番号を与える。基礎資料は筆者が実物を確認できた最も早い版のみとし、特に必要が無い限り再版や改訂版については言及しない。

第一期の教材の中で通常の形式のものにはIaで始まる番号を与える。多言語を併記、対照した教材で粵語を含むものには原則として言及しないが、第一期の出版物についてのみ第7節で参照する。これに対してはIbで始まる番号を与える。非売品や内部発行の教材にも原則として言及しないが、第一期のものについてのみ第7節で参照する<sup>⑦</sup>。これに対してはIcで始まる番号を与える。辞典類（字典・辞典・会話辞典）や語彙集のみから構成される図書<sup>⑧</sup>、研究書としての性格が強い図書は取り上げない<sup>⑨</sup>。

尚、現代日本では粵語のことを「広東語」と称するが、第二次世界大戦以前の台湾では客家語が「廣東語」と称されることが多かった。田上（2007: 156）が述べるように、日本統治期に行われた戸籍調査では「廣東語」が客家語を指

---

天窗 ある香港女性と日本男性の物語』（青木出版印刷公司，2000年）、李兆麟・田中真澄『めぐりあいそしてさよなら（南の香港物語）』（青木出版印刷公司，2002年）、李兆麟・田中真澄『風水師一読みながら学ぶ広東語』（青木出版印刷公司，2005年）のように、設計が独創的でありかつ学習効果が期待できる教材が香港ではこれまでに数点刊行されている。

⑦ 第二期と第三期については参照しない。

⑧ 例えば、鄭兆麟『廣東語發音字典』（著者発行，1936年）、陳鐵筆・田中興四太郎『日・英・廣東語會話辭典』（岡倉書房，1942年）、香坂順一・林耀波『廣東語會話典』（東都書籍臺北支店，1943年）。

⑨ 例えば、香坂順一『廣東語の研究 附常用文字聲音字典』（臺北高等商業學校調査課，1942年）、藤塚將一『中国言語学 廣東語と北京語の發音』（天理大学おやさと研究所，1958年）。

す用語として用いられた。当時「廣東語」と題した教材や辞典には、客家語のものが含まれている。これらは本論の研究対象ではない。例えば、志波吉太郎『廣東語會話篇』（臺灣日日新報社，1915年）、劉克明『廣東語集成』（新高堂書店，1917年）、菅向榮『標準廣東語典』（臺灣警察協會，1933年）、臺灣總督府（編）『廣東語辭典』（臺灣總督府，1932年）などである<sup>⑩</sup>。これらが粵語の教材でないことは、仮名で記された基礎語彙から明らかである（表1）。

【表1】20世紀前半の台湾客家語教材に記された基礎語彙

	人	代名詞 (一人称単数)	指示詞 (近称)	指示詞 (遠称)	指示詞 (不定称)
廣東語會話篇	人ニン	我ガイ	此リヤ	彼カイ	何ナイ
標準廣東語典	人ギヌ	吾, 我ガイ	此リア, リイ	彼カイ	奈ナイ

粵語教材の一つである鄭兆麟『簡易廣東語』（1938年）では、「人」は仮名で「ヤン」、「わたし」は「ゴオー」、「これ」は「ニー」、「あれ」は「コオー」、「どれ」は「ピン」と記されているが、これらはいずれも表1の形式と明らかに異なる音価を示す。旧時の台湾で粵語とは別に客家語のことを「廣東語」と称した事実は、中国学に従事する者にとって従来常識であったと思われる<sup>⑪</sup>。ところが、21世紀に入って以後、客家語教材を粵語教材だと誤認した論著や逆に粵語教材を客家語教材と同列に論じた論著が現れているため、注意を要する。

⑩ 『廣東語集成』については彭（2017）で詳細な考察が行われている。

⑪ 香坂順一氏は『廣東語の研究 附常用文字聲音字典』「緒言」で「臺灣に於ける「廣東語」は、實は「客家語」であって […] この點誤解のない様にして戴きたい」と述べ、注意を喚起している。

## 2.2. 説明の有無による分類

本論で言及する教材の数は数十を超える。その構成や内容は一様ではない。そこで、本論では Ia、II、III で始まる番号を与えた教材を、説明を設けているか否かに基づいて以下の三種類に分類する。ここで言う「説明」は機能語や統語法についての説明である。言語体系外の事柄についての説明ではない。

甲類 本文で詳細な説明を施したもの

乙類 本文ではなく注記やコラムで簡単な説明のみを施したもの

丙類 説明を施さないもの

甲類は「詳解型」や「詳注型」、乙類は「略注型」、丙類は「無注型」とでも称すべきものである。丙類は語例や文例といった言語データとその和訳の羅列に終始している。

教材の構成と内容にはその教材の編纂目的や用途が反映していると考えられる。特に、学習上重要である語や構文について説明を施し用例を示しているか否かは、編纂目的や用途を理解する上で重要な指標の一つである。甲類は熟成志向の教材、丙類は速成志向の教材である可能性がそれぞれ高いことは言を俟たない。その一方で、授業で用いる場合、甲類は担当教員が教え方や個性を発揮する余地が相対的に小さいのに対し、説明を全く施していない丙類は逆に大きいと言える。

## 2.3. 標準粵語の音韻体系

本論で言及する教材は 1938 年から 2012 年に至る約 75 年間に刊行されている。後述するとおり、第一期の教材には粵語の標準についての言及を欠くものが多く、また粵語の地理的変種の干渉が疑われるものも皆無ではない。それに加えて、言語体系は時と共に変化する。そこであくまでも参考のために、黄錫凌『粵音韻彙』（1940 年）の記述に基づいて 1930 年代の広州の音韻体系を示しておく。これは本論が第一期の教材についての論述に多くの紙面を割くためである。

『粵音韻彙』が記す声母の体系は以下のとおりである。但し、//に記した音韻表記は筆者の解釈によるものである。

b̥ /p/      p<sup>h</sup> /p<sup>h</sup>/      m /m/      f /f/  
 d̥ /t/      t<sup>h</sup> /t<sup>h</sup>/      n /n/      l /l/  
 d͡z /ts/      ts<sup>h</sup> /ts<sup>h</sup>/      s /s/      j /j/  
 ɡ /k/      k<sup>h</sup> /k<sup>h</sup>/      ŋ /ŋ/      h /h/  
 ɡw /kw/      kw<sup>h</sup> /k<sup>h</sup>w/      w /w/

韻母の体系は以下のとおりである。

a      ai      au      am      an      aŋ      ap      at      ak  
       ei      eu      em      en      eŋ      ep      et      ek  
       ei  
 ε                               εŋ           ek  
 i           iu      im      in      iŋ      ip      it      ik  
       ou  
 ɔ      ɔi           ɔn      ɔŋ      ɔt      ɔk  
 œ           œy      œn      œŋ      œt      œk  
 u      ui           un      uŋ      ut      uk  
 y                yn           yt  
                          m           ŋ

声調の体系は以下のとおりである。「変音」と呼ばれる、調値の変化を経た派生形式はここには含めない。丸括弧内は今日の中国語学で広く用いられている調類名を筆者が付記したものである。

	平	上	去	入
高調	高平（陰平）	高上（陰上）	高去（陰去）	高入（上陰入）
中調				中入（下陰入）
低調	低平（陽平）	低上（陽上）	低去（陽去）	低入（陽入）

歴史的に規範としての地位に在った広州の音韻体系は、20世紀を通して若干の変化を遂げた。20世紀前半には3つの変化が起きている。①声母では齒茎破擦音・摩擦音 /ts/、/tsʰ/、/s/ と後部齒茎破擦音・摩擦音 /tʃ/、/tʃʰ/、/ʃ/ がそれぞれ合流し、破擦音・摩擦音は一組のみとなった。②韻母 /ɿ/ が /i/ に合流した。③韻母 /om/ と /op/ がそれぞれ /ɛm/ と /ɛp/ に合流した。これらの変化はいずれも音韻体系を単純な方向へと導いた。話者の越境によって広州を中心とする珠江デルタの粵語方言群が地理的に転移し、その後独自の変化を経て今日に至る香港の粵語も、これらの音韻変化を経た姿を呈する。但し、1930年代末期の香港では、この3つの変化が全て完了に至っていたわけではない（吉川 2009: 142-147）。

香港では20世紀後半にも幾つかの変化が進行もしくは顕在化した。④声母 /n/ の /l/ への合流、⑤声母 /ŋ/ の消失、⑥声母 /kw/ の /k/ への合流（および /kʰw/ の /kʰ/ への合流）、⑦広母音に後続する韻尾 /n/ と /ŋ/ の合流、⑧広母音に後続する韻尾 /t/ と /k/ の合流である。声調では、⑨陰平の高降調から高平調への変化、⑩高平調で実現する「変音」と陰平との合流、⑪陽上と陰上の接近。しかし、これらの変化は第三期の教材にすら殆ど反映していない。

### 3. 刊行状況概観

#### 3.1. 黎明期（1930年以前）

日本で刊行された、粵語の言語データを専門に記した最初の書物は、柳澤信大『粵東俗字便蒙解』（1870年）である。しかし、これは馬（2010: 90-91, 104）が指摘するとおり、基本的に鄭全福（Kwong Tsun Fuk. 1836-?）即ち鄭其照の手に成る『字典集成』初版本（1868年）の「粵東俗字註解」に掲げられた粵語に特徴的な語彙を列挙して、和訳を付したものに過ぎない。例えば、本書第1丁表には「槓<sup>ハコ</sup>箱ナリ」「餸<sup>ナ</sup>菜ナリ」「野<sup>ヤ</sup>物<sup>モノ</sup>ナリ東西之謂ヒナリ」「遮<sup>シヤ</sup>傘<sup>カラカサ</sup>ナリ」と記されているが、見出し語に付されたルビ「ヤ」「シヤ」

は日本漢字音であり、粵語音ではない。そのため、粵語教材に含めるべきか否かは議論の余地が有ろう。本論では本書について論じない。

その次に古い『通俗實用廣東會話』(1909年)は、香港在住の原荒衛という人物が著したもので、東京本郷区湯島新花町のホーム社が発行所となっている。「單語」(1-60頁)と「會話」(61-166頁)から成り、巻末には「附録」(1-23頁)として香港の地理や気候、交通に関する事柄が述べられている。「單語」は「天ノ部」から「旅行ノ部」までの24類、「會話」は「通常ノ挨拶」から「詩文」までの26類から成るが、この様な構成は後述する第一期の教材に広く見られるものであり、本書を第一期の萌芽と見なすに有利な特徴と言える。しかし、本書には第一期の教材と決定的に異なる特徴も存在する。それは、収録された文例の多数が古典中国語(文言文や白話文)で示されていることである。漢字に付されたルビは粵語音を反映しているが、文という言語単位で捉えると音声言語としての粵語の標準文体ではなく、寧ろ古典中国語を粵語音で発音したと見なすべき例が多い。(1)はその一つである。

- (1) ニー チ イン クワン チョイ シイ ファウ  
你知原君在此否 アナタハ原君ヲ御存デスカ

『通俗實用廣東會話』70頁

本書は漢字や仮名の誤植がやや多い。

その次に古い浅山伊三郎『商業粵音指南』(1919年)は、(2)に引用するとおり粵語の文章だけを漢字のみで記した書物である。そのため、想定された用途や学習方法を窺い知ることは少し難しい。

- (2) 今日有隻祖家船埋頭。我哋行有個新伙記嚟。我去船上接佢埋嚟咯。  
貴行先派都有幾個人嚟。家吓再有人嚟。我睇貴行生意日日發達嚟。

『商業粵音指南』第一

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

本書は非売品であることが奥付に明記されており、発行所や刊行地は記されていない。日本国内で刊行された教材であると推断することができないため、本論ではこの僅か 30 丁の小冊子についても論じない。

その次は福屋正男『日粵會話』（1923 年）である。しかし、本書は広東（現在の広州）の東方日報社から刊行されているため、本論では論じない。但し、本書は重要な特徴を幾つも有するため、簡潔に紹介しておく。本書は 406 頁の大著であり、「音聲篇」「語法篇」「會話篇」「單語篇」から成る、熟成志向の本格的な教材である。発音は「音聲篇」では仮名とラテン文字で、それ以外の篇では仮名のみで記されているが、馬（2021）がその仮名表記の特徴について論じている。声調も記されており、点・線と数字を混在させた方法が用いられている。40 頁近くに及ぶ「音聲篇」の中には発音練習が含まれている。150 頁に及ぶ「語法篇」は品詞毎に章を分け、かつ動詞の練習問題を含む。150 頁に及ぶ「會話篇」は場面毎に課を分けている。50 頁に及ぶ「單語篇」では語義範疇毎に語例が列挙されているのみならず、末尾に罵詈雑言や隠語に特化した小節が設けられている。黎明期にこれほど高度な詳解型教材が刊行されていた事実は、本論第 4 節で述べる第一期の状況に照らして逆説的ですからあり、その位置付けは特別なものにならざるをえない。

### 3.2. 第一期（1938 年から 1944 年まで）

粵語教材は日本で定期的に刊行されてきたわけではない。刊行が集中した時期が 2 つ存在し、両時期の間には寥々たる期間が長く続いた。

刊行が相次いだ最初の時期は 1938 年から 1944 年までである。本論ではこれを第一期と呼ぶことにする<sup>⑫</sup>。この期間は 1937 年 7 月 7 日の盧溝橋事件に端

---

⑫ その数年前には、1930 年に天理外国語学校で『広東語會話大全』や『広東語教本』が編纂され、1932 年に周慶慈『広東語教本卷一』が大阪外国語学校から発行されている（天理大学中國語学科研究室 1952: 32）。いずれも筆者未見。そのた

を發した日中戦争の時期と重なる。つまり、大日本帝国が中国や東南アジアでの侵攻を進めた時期である。侵攻地での人民との意思疎通を円滑に行うために、現地語の習得は急務であった。これは軍人のみならず、商人にとっても同じであったと思われる。例えば、楊良『商と兵隊廣東語會話』（1939年）の書名はそれを如実に表している。

本論の基礎資料の内、第一期に属するものは以下の各書である<sup>⑬</sup>。著者名、書名、刊行地、出版社名、初版発行年月日のみを掲げる。判型や頁数といった書誌情報、および構成については4.1で概説する。

Ia-01 鄭兆麟『簡易廣東語』（東京：文求堂書店，1938年4月20日）<sup>⑭</sup>

Ia-02 臺灣總督府文教局『日粵會話』（臺北：臺灣總督府文教局，1938年7月15日）<sup>⑮</sup>

Ia-03 木川光雄『廣東語初歩』（横濱：東光寺，1938年10月21日）<sup>⑯</sup>

Ia-04 長野政来・神田樹『日粵會話讀本』（臺北：福大公司，1938年11月11日）

Ia-05 江川金五『かなつき廣東語會話』（東京：大阪屋號書店，1939年1月30日）<sup>⑰</sup>

---

め、出版市場に流通する商業出版物であったか否かを考証するのは困難である。これらを第一期の前兆と見なすか否かについては、態度を留保せざるをえない。

⑬ その他に、1939年に楊良が『広東語早わかり』を著している（天理大学中國語学科研究室1952:32）。また、鄭兆麟『広東語教科書第二冊』『広東語教科書第三冊』が天理外国語学校で発行されている（天理大学中國語学科研究室1952:33）。1941年には陳泉旺『広東語講義』、1942年に陳泉旺『広東語教本』『広東語課本』が謄写版で発行されている（天理大学中國語学科研究室1952:32-34）。いずれも筆者未見。

⑭ 書名と著者名は奥付に従う。表紙には「簡易廣東語會話」「鄭兆麟編」と記す。

⑮ 著者名は奥付に従う。表紙には「文教局學務課編」と記す。

⑯ 書名は奥付に従う。表紙には「初歩廣東語」と記す。

⑰ 著者名は奥付に従う。『中國語学資料叢刊 第五篇』所収の1939年2月20日再版

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

Ia-06 楊良『商と兵隊廣東語會話』（大阪：日華貿易産業出版部，1939年2月20日）

Ia-07 楊良『實用廣東語會話 附日華俗語對照』（東京：崇文堂出版部，1939年3月8日）<sup>18</sup>

Ia-08 楊良『速成廣東語會話』（大阪：巧人社，1939年4月5日）

Ia-09 楊良『廣東語新會話』（大阪：兵書出版社，藤谷崇文館，1939年5月30日）<sup>19</sup>

Ia-10 山下昇『廣東語講座』（臺北：臺灣放送協會，上卷1940年5月15日，下卷8月28日）<sup>20</sup>

Ia-11 倉田重太郎『日本語廣東語會話』（東京：岡崎屋書店，1940年6月10日）

Ia-12 影山巍『實用速成廣東語』（東京：文求堂書店，1940年12月30日）

Ia-13 張源祥『廣東語の會話』（大阪：象山閣，1942年11月15日）

Ia-14 岡本一雄『廣東語入門』（東京：文求堂書店，1944年1月25日）

これら Ia に属する教材の多くは 1940 年までに刊行されている。特に 1939 年の前半はほぼ毎月 1 点の教材が刊行されるという頻繁さである。それに対して、太平洋戦争期間中に刊行された教材は 2 点のみと少ない。

多言語を併記、対照した教材で、粵語が含まれるものは以下の各書である。本論では第一期についてのみこの種の教材を第 7 節で参照する。

---

本では扉に「江東金五」と記す。しかし、同年 4 月 25 日発行の版では「江川金五」に修正されている。

<sup>18</sup> 書名は奥付に記されていないため、表紙に従う。

<sup>19</sup> 発行者は奥付に従う。表紙に記された発行者は「藤谷崇文館」のみ。

<sup>20</sup> 本書は上下巻各一冊から成る。著者名は表紙に従う。奥付に著者・編者名は記されていない。書名は奥付に従う。表紙に記された書名は「廣東語講座 ラヂオ・テキスト上巻」と「廣東語講座 ラヂオ・テキスト下巻」。

Ib-01 鴻山俊雄『北京語と廣東語』（魚崎町：東亜學社，1939年5月25日）

Ib-02 鴻山俊雄『全國通用簡易支那語 一名北京語と上海語廣東語』（魚崎町：東亜學社，1942年7月1日）

Ib-03 香坂順一『南支華僑會話要訣』（東京：外語學院出版部，1942年11月20日）<sup>②①</sup>

Ib-04 永持徳一『趣味の支那語』（東京：泰山房，1943年1月15日）<sup>②②</sup>  
非売品や内部発行の教材は以下の各書である。本論では第一期についてののみこの種の教材を第7節で参照する。

Ic-01 天理教時局委員會『廣東語會話』（丹波市町：天理教時局委員會，1939年6月15日）

Ic-02 鄭兆麟（編）『新廣東語教科書 第一冊』（天理：天理外國語學校廣東語部，1940年4月23日）

Ic-03 山下昇『廣東語研究』（臺北：著者発行，上巻1940年5月17日，下巻1940年8月28日）

Ic-04 陳徳仁『廣東語教科書(1)』（大阪：大阪外國語學校大陸語學研究所，1943年10月15日）

鄭兆麟『新廣東語教科書 第一冊』と陳徳仁『廣東語教科書(1)』は謄写版である。『新廣東語教科書 第一冊』には非売品との記載こそ無いが、定価も記されていないため、内部発行であることは確実と見られる。山下昇『廣東語研究』は非売品であることが奥付に明記されている<sup>②③</sup>。本書は上下巻とも内容および

---

②① 書名は奥付に従う。扉には「南支華僑會話要訣（日本語—廣東語—福建語）」と記す。

②② 書名は奥付に従う。扉には「趣味の支那語—北京・上海・廣東對照會話讀本—」と記す。

②③ 筆者が閲覧した『廣東語研究』の上巻は臺灣研究古籍資料庫所蔵本、下巻は香港

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として  
 頁数が同氏の手になるラジオ講座用の『廣東語講座』と符合する。『廣東語研究』を用意した目的は『廣東語講座』の試行本として配付することだった可能性が有る。『廣東語研究』の奥付に発行所が記されていない代わりに、同氏の名が編輯兼発行者として記されていることは、それを示唆するものである。『廣東語講座』と『廣東語研究』について奥付に記された情報を纏めたものが表2である。

【表2】『廣東語講座』と『廣東語研究』の奥付情報

	書名	発行所	編輯兼発行者	印刷所	定価
Ia-10 廣東語講座 上巻	廣東語講座	臺灣放送協會	—	盛文社	貳拾五錢
Ic-03 廣東語研究 上巻	—	—	山下昇	盛文社	非賣品
Ia-10 廣東語講座 下巻	廣東語講座	臺灣放送協會	—	盛文社	貳拾五錢
Ic-03 廣東語研究 下巻	—	—	山下昇	盛文社	非賣品

以上の他に、下巻のみ現存している教材として以下のものが有るが、奥付を欠き、刊行地が不明である。発行所が「廣東興亞報國會」であり、広東で刊行されたものと推断されるため、本論の研究対象には含めない。

富田恭平(編)『廣東語講座 ラジオ・テキスト』(廣東興亞報國會, 1944年5月25日緒言)

---

中文大学図書館所蔵本とコーネル大学図書館所蔵本である。コーネル大学図書館では『廣東語會話』という書名が与えられているが、表紙に書名は記されていない。『廣東語會話』は真の書名ではないと思われる。また、香港中文大学図書館所蔵本が目次を有するのに対し、コーネル大学図書館所蔵本はこれを欠く。但し、内容面で両者に違いは見られない。

### 3.3. 第二期（1955年から1968年まで）

第二次世界大戦の終了と共に、粵語教材の刊行状況は一変する。1945年以後の35年間に新たに刊行された教材は僅か数点のみである。それらは主に1955年から68年までに刊行されている。この14年間を本論では第二期と称する。第一期を躍進期と称するならば、第二期は停滞期ということになろう。

本論で言及する教材の内、第二期に属するものは以下の各書である。判型、頁数、構成については5.1で概説する。

II-01 藤塚将一『最新廣東語入門書』（相楽郡：著者発行，1955年3月自序）<sup>24</sup>

II-02 藤塚将一『廣東語入門書』（名古屋：采華書林，1964年9月1日）<sup>25</sup>

II-03 藤塚将一『廣東語速成』（名古屋：采華書林，1967年2月1日）<sup>26</sup>

II-04 金丸邦三『広東語会話練習帳』（東京：大学書林，1968年1月15日）

岡本一雄『廣東語入門』から藤塚将一『最新廣東語入門書』までの10年間に、新たな教材は登場しなかったようである。この10年という空白に加えて、『最新廣東語入門書』が第二次世界大戦以後に最初に刊行された教材であることを根拠として、本論ではその刊行年である1955年を第二期の開始と見なす。第二期の終結は、本論では金丸邦三『広東語会話練習帳』が刊行された1968年とする。同年以後1980年に至るまで、表立った新しい動きは殆ど現れていない。藤塚将一『廣東語速成發音記號』が1979年に刊行されたのが、管見に於いて唯一の新しい動きであるが、本書は同氏の『廣東語速成』を国際音声記号で転写した補助教材に過ぎない。それ以外には『廣東語入門書』の再版

<sup>24</sup> 本書は謄写版であるが、裏表紙に頒価が400円と記されており、商業出版物であったと考えられる。

<sup>25</sup> 書名は奥付に従う。表紙には「萬國音標文字付」を冠する。

<sup>26</sup> 書名は奥付に従う。表紙には旧字体で「廣東語速成」と記す。

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として  
や<sup>27</sup>、『廣東語速成』の増補版しか見当たらない<sup>28</sup>。このことは、当時の日本の  
粵語教育がひとえに藤塚将一氏の努力によって支えられていたことを物語って  
いる。

### 3.4. 第三期（1981年から）

1980年代に入ると、新しい教材の登場が相次ぐ。特に1985年から2005年  
まではほぼ毎年新しい教材が登場している。本論ではこの時期を第三期と称す  
ことにする。第三期の教材は多様化しており、第二期までと異なるタイプの  
教材も多い。そのため、発展期と称してもよい。

1980年代には社会環境や地理条件の良好さから、日本企業の活動拠点として  
香港が好まれた。また、中華人民共和国で改革開放の牽引役を担っていた広  
東省との経済交流に於いても粵語は有用だと見なされたと思われる。1990年  
代に入ると、中華人民共和国への返還が近づいたことで、日本社会全体が香港  
に注目した。

しかし、中華人民共和国への返還後、香港に於ける粵語の地位は徐々に低下  
した。2003年7月に始まった中国大陸居住者に対する個人旅行の解禁は、標  
準中国語「普通話」の香港への流入を決定的なものにし、外国人が香港で粵語  
を用いる必要性を大いに低下させた。これに加えて、2008年以降多数の小学  
校で、粵語に取って代わり普通話を「中國語文」の媒介言語とする教授方法

---

<sup>27</sup> 『廣東語入門書』は増版を続けた。天理大学の広東語講座の教科書として長年に  
わたり使用されたと推測される。第5版（1982年3月）の奥付によると、第2版  
が1970年10月、第3版が1978年3月、第4版が1981年4月に刊行されている。  
ところが、第7版（1991年3月）の奥付には、初版は1955年3月、第2版が1964  
年9月、第3版が1970年10月、第4版が1978年3月、第5版が1981年4月、第  
6版が1982年3月と記されている。この「初版」はII-01『最新廣東語入門書』の  
ことを指すと思われる。

<sup>28</sup> 1977年に天山出版から刊行。

「普教中」が導入された（吉川 2019a: 163-164）。言語推移は確かに進行した。

2010年代に香港では政治状況の悪化が進んだ。こうした不利な要素が存在する現在、教材の今後を予測することは容易ではない。第三期が既に終結したか否かを論じることすら時期尚早であろうと思われる。よって、本論では雨傘運動が起きた2014年を暫定的な下限と見なす。この期間に属する教材は以下の各書である。刊行地はIII-08が横浜である以外は、全て東京である。

III-01 中嶋幹起『広東語四週間』（大学書林, 1981年8月25日）

III-02 香港萬里書店・東方書店(編)『すぐに役立つ広東語会話』（東方書店, 1985年6月25日）

III-03 八角高茂『トラベル香港・広東語会話手帳』（語研, 1986年3月1日）

III-04 中嶋幹起『実用広東語会話』（大学書林, 1987年7月10日）

III-05 北京放送局日本語部(編)『北京放送 ショート・レッスン広東語会話』（東方書店, 1989年4月15日）

III-06 千島英一『香港広東語会話』（東方書店, 1989年7月25日）

III-07 John Chan (陳守強)『香港 街を楽しむガイドと広東語会話』（駸々堂, 1990年6月15日）

III-08 陳翠儀・東後勝明／ジャパントイムズ『SS式すぐに話せる！広東語 [Índeks]』（UNICOM, 1990年10月1日）

III-09 高木百合子『広東語の通になるための——香港・広東語会話「決まり文句」600』（語研, 1991年3月20日）

III-10 千島英一『すぐに使える対話表現700 日常ミニミニ広東語会話』（語研, 1991年8月10日）

III-11 辻伸久『教養のための広東語』（大修館書店, 1992年4月1日）

III-12 日本交通公社出版事業局『ひとり歩きの広東語自遊自在』（日本交通公社出版事業局, 1993年1月1日）

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

- III-13 千島英一『初めて学ぶ広東語』（語研，1993年6月10日）
- III-14 鄧超英『徹底練習 広東語の発音』（ボディソニック，1993年10月25日）
- III-15 千島英一『エクスプレス広東語』（白水社，1994年5月20日）
- III-16 陳敏儀『香港電影的広東語 香港映画で学ぶ広東語 名作・名シーン・名セリフ集』（キネマ旬報社，1995年9月4日）
- III-17 千島英一『香港に行こう！広東語旅行会話』（東方書店，1996年3月30日）
- III-18 千島英一『TPOに応じた自己紹介の広東語会話』（語研，1996年4月10日）
- III-19 郭素霞『はじめての広東語』（明日香出版社，1997年1月28日）
- III-20 馬健全，吉沢弥生『ひとことコミュニケーション広東語——香港便利店』（東方書店，1997年6月30日）
- III-21 陳敏儀『語学王 広東語』（三修社，1997年7月25日）
- III-22 千島英一・劉穎聰『250語のできる やさしい広東語会話』（白水社，1998年6月25日）
- III-23 陳敏儀『香港電影的広東語・續集 香港映画で学ぶ広東語 名作・名シーン・名セリフ集』（キネマ旬報社，1998年10月31日）
- III-24 山本康宏『今すぐ話せる広東語 [入門編]』（ナガセ，1999年10月15日）
- III-25 山本康宏『今すぐ話せる広東語 [応用編]』（ナガセ，2000年4月7日）
- III-26 中島恵『[写真対応] トラブラないトラベル会話 広東語——旅・香港』（三修社，2001年1月15日）
- III-27 山本康宏『楽しんで楽しむ 楽<sup>2</sup> 旅会話 広東語』（ナガセ，2001年4月1日）

- III-28 吉川雅之『広東語入門教材 香港粵語 [発音]』（白帝社，2001年11月1日）
- III-29 飯田真紀・三修社編集部『らくらく旅の香港の広東語』（三修社，2002年12月16日）
- III-30 吉川雅之『広東語中級教材 香港粵語 [応用会話]』（白帝社，2003年1月15日）
- III-31 吉川雅之『広東語初級教材 香港粵語 [基礎文法 I]』（白帝社，2004年6月1日）
- III-32 郭文灝・高崎篤『香港スターと広東語』（三修社，2004年6月18日）
- III-33 中島恵『[写真対応] 香港を旅する会話』（三修社，2004年11月5日）
- III-34 陳敏儀『ゼロから話せる広東語』（三修社，2004年12月15日）
- III-35 鄧超英『広東語レッスン初級1』（スリーエーネットワーク，2005年1月11日）
- III-36 鄧超英『広東語レッスン初級2』（スリーエーネットワーク，2005年4月26日）
- III-37 吉川雅之『広東語初級問題集 ワークブック 香港粵語 [基礎文法]』（白帝社，2006年7月10日）
- III-38 張淑儀・上神忠彦『身につく広東語講座』（東方書店，2010年1月30日）
- III-39 飯田真紀『ニューエクスプレス 広東語』（白水社，2010年2月10日）
- III-40 地球の歩き方編集室(編)『広東語+英語』（ダイヤモンド・ビッグ社，2010年3月19日）
- III-41 藤川伸幸『まずはこれだけ広東語』（国際語学社，2010年10月

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として  
25日）

III-42 吉川雅之『広東語初級教材香港粵語 [基礎会話]』（白帝社、  
2012年4月5日）

第三期の最初の教材である『広東語四週間』が刊行される数年前には、内部発行の教材が数点現れている。1977年に東京外国語大学で行われた語学研修のテキスト『粵語課本Ⅰ発音編』『粵語課本Ⅲ会話編』『粵語常用語彙集』が中嶋幹起氏によって、『粵語課本Ⅱ入門編』が中嶋幹起・李活雄の両氏によって編纂されている。本論は商業出版物として刊行された図書形態の教材について述べるため、これらを以て第三期の開始と見なすことはしない。しかし、これら東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から発行されたテキストが第三期の予兆であることは疑いない。

## 4. 第一期の教材

### 4.1. 各書の構成

第一期のIaに属する各書について以下に概説する。その中には波多野太郎編『中国語学資料叢刊』や六角恒廣編『中国語教本類集成』に影印で収録され、解題が付されたものも有るが、本論では構成という角度から述べる。

#### Ia-01 鄭兆麟『簡易廣東語』

判型は縦12.7cm、横9.5cm<sup>29</sup>。凡例2頁、目次2頁、本文112頁。

本文は「単語」（1-70頁）、「問答」（71-107頁）、「附録」（108-111頁）から成る。「附録」には国名・地名などが列挙されている。112頁には広告が掲載されている。「単語」篇は「数詞・量詞」から「形容詞・副詞・動詞」までの19類から成るが、複合語や「一間屋」の様な数量構造を伴う名詞句も挙げられて

---

<sup>29</sup> 料紙の大きさについて、筆者の計測による数値を取ってミリ単位で示す。以下、同じ。

いる。「問答」篇は「單句（一）」から「病氣」までの12類から成り、文例が列挙されているが、対話形式ではない。また、「單句（一）」は人称代名詞、指示詞、「係」「有」「去」といった基本的な動詞およびその否定形を多く含んでおり、語と句の境界はやや曖昧である。

「附録」を除いた本文の構造は以下のとおりである。[ ]は最上位のユニット、( )はそれを構成する一段下位のユニットを表すものとする。上位のユニットが下位のユニットから構成されることを└で表す。同じ階層に存在する複数のユニットを省略する場合は……を用いる。

(3) [單語]

└ (數詞・量詞)…… (形容詞・副詞・動詞)

[問答]

└ (單句 (一)) …… (病氣)

Ia-02 臺灣總督府文教局『日粵會話』

判型は縦13.0 cm、横9.3 cm。目次8頁、本文352頁。但し、目次の直前にノンブルの無い「はしがき」が1頁分有る。

本文は第一篇「發音」(1-8頁)、第二篇「單語」(9-208頁)、第三篇「會話」(209-352頁)の3篇から成る。「發音」篇では声調、仮名表記、有気音・無気音について簡単な説明が行われている。「單語」篇は「數詞」から「廣州市内外地名」までの45類から成るが、39「助數詞」では専ら数量構造を伴う名詞句が挙げられている。また42「廣東料理」では「鱸ノ翅」「鮑」「家鴨」といった食材毎に料理名が挙げられている。「會話」篇は「行軍巡視」から「短句」までの10類から成り、文例が列挙されているが、対話形式ではない。9「簡易問答」と10「短句」には、それ以外の類に収まらない「有(無イ)」「幾多錢呀(幾ラカ)」「天光咯(夜ガ明ケタ)」「有錯、係咁樣(ソノ通り

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

ダ) といった文や句が挙げられている。但し、10「短句」には語も少なからず含まれている。

本文の構造は以下のとおりである。

(4) [發音]

[單語]

└ (數詞) …… (廣州市内外地名)

[會話]

└ (行軍巡視) …… (短句)

Ia-03 木川光雄『廣東語初歩』

判型は縦 18.2 cm、横 11.7 cm。表紙には「横濱関東學院高等商業部門講師劉瀨章先生校閲」と記す。本文 59 頁。但し、本文の直前に「諸賢へ」と題したノンプルの無い序文が 3 頁分と目次が 3 頁分有る。この序文の冒頭には「去ル六月二十五日發行ノ拙著「廣東語會話入門」(四六版・百二十頁)ヲ出シタルトコロ意外ニモ希望者續出シ、非常ニ多クノ部数ヲ不足シタルヲ以テ、茲ニ改メテ同書中ノ最モ簡易ナルモノノミヲ抄集再版シタル次第デアル」と記されていることから、本書に先行して『廣東語會話入門』という教材が存在していたことが窺えるが、筆者未見のため商業出版物であったか否か不明である。

本文は「單語」(1-28 頁)、「形容詞」(29-30 頁)、「副詞」(31 頁)、「動詞」(31-34 頁)、「單句 (一)」(34-35 頁)、「單句 (二)」(35-40 頁)、「單句 (三)」(41-42 頁)、「疑問詞」(42-46 頁)、「會話」(46-54)、「附録」(55-59 頁) から成る。「單語」に挙げられているのは数詞・量詞・名詞であり、「基数」から「金属」までの 49 類から成る。「會話」は「買物」から「廣東語」までの 4 類から成る。「附録」には専ら広東料理が挙げられているが、「海産物之部」から「中華酒之部」までの 6 類から成る。尚、「形容詞」「副詞」「動詞」では單語で

はなく「大間屋」（大キイ家）や「非常快」（非常ニ速イ）といった句が挙げられている。動作の回数を表す「一次」も「副詞」に収められている。その一方で、「単句（一）」は人称代名詞、指示詞、基本的な動詞およびその否定形から構成されている。単文が列挙されるのは「単句（二）」およびそれ以後である。「疑問詞」に収められているのは殆どが語ではなく単文であり、かつ「來嗎」（來マスカ）の如き語気助詞を用いた疑問文も収められている。

「附録」を除いた本文の構造は以下のとおりである。構成があまり階層を成していない点の特徴である。

(5) [單語]

└─ (基數) …… (金屬)

[形容詞]

……

[會話]

└─ (買物) …… (廣東語)

Ia-04 長野政来・神田樹『日粵會話讀本』

判型は縦 17.0 cm、横 9.0 cm。目次 8 頁、本文 166 頁。但し、目次の直前にノンプルの無い序が 2 頁分、凡例が 1 頁分有る。

本文は第一篇「發音」（1-8 頁）、第二篇「單語」（9-72 頁）、第三篇「會話」（73-157 頁）の 3 篇と「附録」（159-166 頁）から成る。「發音」篇では声調、仮名表記、有気音・無気音について簡単な説明が行われているが、文面は臺灣總督府文教局『日粵會話』のものと殆ど同じである。「單語」篇は「數詞」から「代名詞其他」までの 27 類から成る。「會話」篇は「形容詞ト簡單會話」から「理髮店」までの 23 類から成る。「附録」には省名・地名などが列挙されている。本書が挙げる語例や文例は、その大多数が『日粵會話』のものと同じで

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象としてあり、例えば本書 20 頁の語彙項目「朝、三時十五分、一時間、先週、今週、來週、一週間、日曜日」は『日粵會話』 22 頁に同じ順序で見られる。記された語例も同じである。そのため、本書は『日粵會話』から強い影響を受けたものと考えられる。

「附録」を除いた本文の構造は以下のとおりである。

(6) [發音]

[單語]

└ (數詞) …… (代名詞其他)

[會話]

└ (形容詞ト簡單會話) …… (理髮店)

Ia-05 江川金五『かなつき廣東語會話』

判型は縦 15.0 cm、横 10.0 cm。序 4 頁、目次 4 頁、本文 204 頁。

本文は「文法篇」(1-76 頁)、「單語篇」(76-114 頁)、「會話篇」(115-197 頁)の 3 篇と、付録と見なすべき人名・地名集(197-204 頁)から成る。「文法篇」は「數に就いて」から「時辰」までの 7 章から成り、幾つかの章は更に複数の課から成る。例えば、第三章「副詞」は第一課「程度を表はすもの」、第二課「打消の副詞句」、第三課「時の副詞句」から成る。本書の特徴は、「文法篇」の各章では機能語について説明を施している点に在る。「單語篇」は「天文・氣候」から「軍事・政治」までの 20 類から成るが、句や文は挙げられていない。「會話篇」は「一般會話」「商業會話」「軍事治安會話」の 3 類から成る。

人名・地名集を除いた本文の構造は以下のとおりである。

(7) [文法]

└ (數) …… (時辰)

└ 數の読み方 …… 序數

[單語]

└ (天文・氣候) …… (軍事・政治)

[會話]

└ (一般會話) …… (軍事治安會話)

Ia-06 楊良『商と兵隊廣東語會話』

判型は縦 12.7 cm、横 8.8 cm。大阪毎日新聞神戸版からの転載記事、自序、本文を合わせて 151 頁。大阪毎日新聞からの転載記事には著者の足跡が記されている。それによると、楊良氏は広東省中山県の生まれであり、大阪金物組合などで中国語の講師を務めた人物である。

本書は「發聲」から「行軍」までの 25 の部分から成る。1「發聲」には声調についての簡単な説明に続いて、平上去入に属する漢字がそれぞれ列挙されている。2「人稱」からは語例が列挙されている。

本文の構造は以下のとおりである。構成が階層を成していない点の特徴である。

(8) [發聲]

[人稱]

……

[行軍]

Ia-07 楊良『實用廣東語會話 附日華俗語對照』

判型は縦 14.5 cm、横 7.3 cm。序 1 頁、発音の説明 9 頁、目次 2 頁、本文

137 頁。

本文は「必要単語」（1-48 頁）、「日常簡易問答」（49-56 頁）、「普通會話」（57-74 頁）、「日支事變關係篇」（75-93 頁）の 4 篇と、「附録」の「日華俗語對照」から成る。「必要単語」は「數詞」から「飲食」までの 24 類から成る。「普通會話」は「汽車に乗る」から「電話」までの 5 類、「日支事變關係篇」は「必要単語」から「宿營」までの 5 類から成る。

「附録」を除いた本文の構造は以下のとおりである。

(9) 〔必要単語〕

└─ (數詞) …… (飲食)

[日常簡易問答]

[普通會話]

└─ (汽車に乗る) …… (電話)

[日支事變關係篇]

└─ (必要単語) …… (宿營)

Ia-08 楊良『速成廣東語會話』

判型は縦 14.5 cm、横 10.5 cm。発音篇 5 頁、本篇 160 頁。但し、発音篇の直前にノンプルの無い序が 2 頁分、目次が 3 頁分有る。巻頭に配された発音篇では声調と声母について簡単な説明が施されている。

本篇 140 頁およびそれ以後は、目次では「軍事篇」と記されているが、140 頁以前と体裁に違いは無い。本篇は「簡單廣東語」から「親善」までの 13 類から成る。「軍事篇」は「問話」と「宣撫」の 2 類から成る。全ての類は基礎語彙「必要単語」と文例「問答短句」に分かれており、前者が先に配され、後者がその後に配されている。例えば、「簡單廣東語」では「必要単語」（1-21 頁）の直後に「問答短句」（21-30 頁）が続く。

本文の構造は以下のとおりである。構成があまり階層を成していない点の特徴である。

(10) [發音篇]

---

[簡單廣東語]

[初對面]

……

[親善]

[軍事篇]

└ (問話) (宣撫)

Ia-09 楊良『廣東語新會話』

發音篇5頁、目次3頁、本篇および地名集が112頁<sup>③〇</sup>。卷頭に配された發音篇は声調についての簡単な説明のみを施す。

本篇は「代名詞」から「軍事用語」までの15類から成る。幾つかの類では基礎語彙「必要單語」が先行し、その後に文例が続く。「軍事用語」の後には地名集(109-112頁)が付されている。

地名集を除いた本文の構造は以下のとおりであり、階層を成していない。

(11) [發音篇]

---

[代名詞]

……

[初見面]

---

③〇 本書については『中國語教本類集成 第五集』所収の影印本を閲覽した。その解題によると判型は縦12.6cm、横9cmである。

[軍事用語]

Ia-10 山下昇『廣東語講座』

本書はラジオ講座のテキストとして市販されたものであり<sup>③</sup>、他の教材と些か性格が異なる。

上巻は粵語とその発音についての説明が8頁、本篇が125頁。但し、本篇末尾は第1声から第10声まで声調毎に漢字を羅列したリスト(120-125頁)である。

粵語についての説明「廣東省城語ニ就イテ」では「廣東省城語」即ち粵語とはどこで話されている言語かについて簡単に述べられている。この種の説明を施した教材は、少なくとも本論で考察するものとしては本書が初めてである。それに続く「発音」では声調符号、声調、有気音・無気音について説明が行われ、簡単な音節表が提示されている。本篇は30の「講」から構成されている。これは今日の教材で広く用いられている「課」に相当するものである。講の構成は必ずしも一様ではないが、学習対象たる基礎語彙とその用例を先に配し、その後「応用」と称して多くの表現を配している。「参考」や「俗語」と称して発展的な語や表現を補充した講も有る。また、本書は「応用問題」と称する練習問題を3箇所<sup>④</sup>に設けている。練習問題を設けた教材は、少なくとも本論で考察するものとしては本書が初めてである。

巻末の漢字リストを除くと、本文の構造は以下のとおりである。

(12) [廣東省城語ニ就イテ・発音]

[第1講]

---

<sup>③</sup> 講座は1940年5月23日から毎週火・木・土曜日に放送された。放送時間は午前7時半から8時までであった。

└ (課文) (應用)

.....

[第30講]

└ (課文) (應用)

下巻は目次が2頁、本篇が138頁。但し、本篇末尾は「附録」たる人名地名集(125-132頁)と第1声から第10声まで声調毎に漢字を羅列したリスト(133-138頁)である。

第31講から第56講までを取めるが、上巻と同じ体裁となっているのは第36講までである。第37講は文末語気助詞についての説明と文例であり、第38講から第55講までは会話中心の内容となっている。そして第56講は「放送文(1)」と題し、報道文を学習するように設計されている。本書116頁には、本課の文章が台北放送局で毎晩放送されていた粵語による報道であることが記されている。

Ia-11 倉田重太郎『日本語廣東語會話』

判型は縦14.8cm、横10.9cm。序・例言・日本字音譜が14頁、目次が6頁、本文が150頁。

本文の前半(1-96頁)は「數目」から「副詞」までの40類から成る。各類とも基本的に先ず語例を掲げ、その後に文例を掲げる。但し、「代名詞」「色」「形容詞」「動詞」「副詞」は語例のみを掲げる。本文の後半(97-150頁)は「會話篇」と称する部分であり、「起身」から「軍事」までの14類と、その後続く「問路」「買貨」「偵察」の3類から成る。各類とも文例のみを掲げるが、「軍事」は語例のみを掲げる。「問路」「買貨」「偵察」は「軍事會話」として括られている。

本文の構造は以下のとおりであり、階層は成していないと言ってよい。

(13) [數目]

……

[副詞]

{ [起身]

……

{ [問路]

{ [買貨]

{ [偵察]

會話篇

Ia-12 影山巍『實用速成廣東語』

判型は縦 17.5 cm、横 10.3 cm。亀山正夫による序 2 頁、凡例 4 頁、目次 10 頁。本文 170 頁。巻頭に財政部次長陳日平による序を 2 頁分冠するが、ノンブルは無い。

本文は第一篇「基本單語」(1-48 頁)、第二篇「日用散語例」(49-96 頁)、第三篇「實用要語例」(97-170 頁)の三篇から成る。「基本單語」篇は第一章「代名詞」から第七章「日用名詞」までの 7 章から成り、第二章「日用要語」と第六章「方位」を除いて、各章とも更に複数の節から成る。例えば、第一章「代名詞」は 1「人称代名詞」、2「指示代名詞」、3「疑問代名詞」の 3 節から成る。「日用散語例」篇は「一」と「二」の 2 つに分かれる。「一」は「いる・いない」から「物」までの 12 類から成り、重要語彙を扱う。「二」は「買物の時」から「人に應對する時(二)」までの 10 類から成り、場面毎に文例を挙げる。文例には對話形式のものも多く含まれている。「實用要語例」篇は「係・唔係」から「就」までの 25 類から成る。

本文の構造は以下のとおりである。

(14) [基本単語]

└ (代名詞) …… (日用名詞)

└ 人称代名詞 …… 指示代名詞

[日用散語例]

└ (一) (二)

└ いる・いない …… 物

[實用要語例]

└ (係・唔係) …… (就)

Ia-13 張源祥『廣東語の會話』

判型は縦 18.9 cm、横 12.6 cm。序と目次を合わせて 12 頁、本文 250 頁。序には「語音について」「聲調について」「重念について」という発音説明が盛り込まれている。

本文は「會話の豫備知識」から「弔問」までの 28 章から成る。第一章「會話の豫備知識」(1-58 頁) は第一節「數へ方」、第二節「述べ方」、第三節「問ひ方・答へ方」から成り、分量が突出して多い。しかし、他の各章は概して 10 頁以下の分量である。第一節「數へ方」(1-9 頁) は「自然數詞」から「貨幣の數量」までの 5 つの部分、第二節「述べ方」(10-25 頁) は「何々は何々である」から「種々の修飾語(附加語)を伴へる形」までの 6 つの部分、第三節「問ひ方・答へ方」(26-57 頁) は「嗎? の形を以てする問ひ方」から「不完全な(省略された)問ひの形」までの 6 つの部分から成る<sup>32</sup>。

本文の構造は以下のとおりである。

---

<sup>32</sup> 58 頁はコラム「補充 1」であり、天候気象についての表現が紹介されている。

(15) [會話の豫備知識]

└— (數へ方) …… (問ひ方・答へ方)

[天氣と氣候]

……

[弔問]

尚、本書は第一期の教材にあまり見られない特徴を2つ有している。一つは、各章とも文例が基本的に対話形式となっていることである。もう一つは、文例に対して仮名のみならずラテン文字による音標も施していることである。

Ia-14 岡本一雄『廣東語入門』

判型は縦 21.0 cm、横 14.6 cm。目次 4 頁、本文 253 頁。但し、目次の直前にノンブルの無い序が 1 頁分有る。

本文は第一章「廣東語の發音と練習」と第二章「廣東語の單語と會話文の練習」から成る。「廣東語の發音と練習」(1-17 頁)は第一節「廣東語の發音について」と第二節「九聲の練習」から成り、「九聲の練習」(5-17 頁)は「高聲——上第一聲」から「上第四聲、下第四聲と中聲の比較練習」までの 16 課から成る。「廣東語の單語と會話文の練習」(18-253 頁)は第一節「單語の練習」と第二節「廣東語の會話文」から成り、「單語の練習」(18-32 頁)は「上第一聲の單語」から「有息音と無息音の單語」までの 10 課から成る。「廣東語の會話文」(33-253 頁)は「俾」から「假期」までの 50 課から成るが、課末に練習問題を設けた課が多い。また、文例は基本的に対話形式となっている。第十二課「呢處、個處、邊處」およびそれ以前の多くの課は機能語を中心とした内容であるのに対し、第十三課「去遊水」およびそれ以後の多くの課は場面を前提とした内容となっている。

本文の構造は以下のとおりである。

(16) [廣東語の發音と練習]

└ (廣東語の發音について) (九聲の練習)

└ 高聲 ……

[廣東語の單語と會話文の練習]

└ (單語の練習) (廣東語の會話文)

└ 上第一聲の單語 …… 有息音と無息音の單語

#### 4.2. 説明の有無と階層化の有無

本論 2.2 で述べた基準に基づいて第一期の教材を分類すると、以下のとおりである。

甲類：影山巍『實用速成廣東語』（1940年）

乙類：江川金五『かなつき廣東語會話』（1939年）、山下昇『廣東語講座』（1940年）、張源祥『廣東語の會話』（1942年）、岡本一雄『廣東語入門』（1944年）

丙類：鄭兆麟『簡易廣東語』（1938年）、臺灣總督府文教局『日粵會話』（1938年）、木川光雄『廣東語初歩』（1938年）、長野政来・神田樹『日粵會話讀本』（1938年）、楊良『商と兵隊廣東語會話』（1939年）、楊良『實用廣東語會話』（1939年）、楊良『速成廣東語會話』（1939年）、楊良『廣東語新會話』（1939年）、倉田重太郎『日本語廣東語會話』（1940年）、

甲類は1点のみ、乙類は4点、丙類は9点である。説明を施さない教材が多数を占めていることが分かる。

この結果に 4.1 で述べた構成の階層化の有無を加えると、表3のようになる。甲類は階層化が高度であるのに対し、丙類は階層化が低度であるかもしくは階層化が行われていないことが分かる。これは、丙類が単に語例や文例といった言語データの羅列に終始していることと表裏一体を成す。ある程度の学習

【表3】説明の有無と階層化の有無に基づく粵語教材の分類（第一期）

	階層化が高度 (階層数3)	階層化が低度 (階層数2)	階層化無し (階層数1)
甲類	Ia-12 実用速成廣東語		
乙類	Ia-05 かなつき廣東語會話 Ia-14 廣東語入門	Ia-10 廣東語講座 Ia-13 廣東語の會話	
丙類		Ia-01 簡易廣東語 Ia-02 日粵會話 Ia-03 廣東語初歩 Ia-04 日粵會話讀本 Ia-07 実用廣東語會話	Ia-06 商と兵隊廣東語會話 Ia-08 速成廣東語會話 Ia-09 廣東語新會話 Ia-11 日本語廣東語會話

効果が期待されるのは丙類ではなく、甲類か乙類の教材であったと想像される。

第一期の教材は、語彙・會話ともに多くの類に分れ、各類とも語例や文例の羅列に終始したものが多。今日の教材に見られる、一定の頁数から成る「課」を基本ユニットとする構成は、ラジオ講座のテキストであった山下昇『廣東語講座』では採用されているものの、それ以外では稀である。各類の頁数は一様ではなく、かつ多くの言語データを含むため、学習進度の予測や学習内容の管理を行うのは容易ではない。画一的な学習を前提とする環境には適していなかったと思われる。どのように学習を進めるかは教師や学習者の裁量に委ねられていたのであろう。速成志向の教材は特にそうであったと思われる。

#### 4.3. 目標言語の標準について

第一期の教材は、その多くが速成志向の教材であったためか、目標言語たる粵語の標準について述べていない。述べているのは山下昇『廣東語講座』上巻と影山巍『実用速成廣東語』のみである。『廣東語講座』上巻では、粵語についての説明「廣東省城語ニ就イテ」およびその直後の「發音」で以下のように述べている。

(17) 廣東省城語（省城話、粵語）ハ南支方面ノ標準語デアリマシテ特ニ商業上最モ廣ク用ヒラレテキルノデ、其ノ範圍ハ香港、廣東、廣西、佛領印度支那遠クハ南洋各地ニモ及ンデ居ルノデアリマス。

『廣東語講座』上卷「廣東省城語ニ就イテ」

(18) 單ニ廣東語ト申シマシテモ嚴格ニ申セバ、二十數種ノ發音ガアルノデアリマス、恰モ日本デモ九州地方ト關西地方或ハ東北地方ノ言葉ガ異ツテキル様ニ甚敷イノハ廣東デハ村ニヨツテモ多少發音ガ異ツテキルノデアリマス、從ツテ外國人デ廣東語ヲ修得シヨウト思ヘバ、標準語デアアル省城語ノ發音ヲ學バネバナリマセン。

同上「發音」

『實用速成廣東語』では「凡例」で以下のように述べている。

(19) 由來廣東語は極めて複雑にして、廣東一省内に行はれる方言數は、實に六十餘種に及ぶとさへ謂はれ [……] 斯かる複雑なる廣東語中の標準語といへば、普通廣州語を指すものであるが、廣東省城廣州市は番禺・花縣・黃埔・虎門・南海・東莞・三水・高要・鶴山・新會・中山・台山等の各地人と客家及び水上生活を營む蜑民等の特種族との雜居地であり、爲に廣州市だけでも十餘種の方言が雜然と混用されて居るのである。本書に登載した廣東語は、著者の過去十個年間の研鑽に據りて、廣州の標準語たる「上番禺語」中の最も高尚なる「西關話」を吟味収録したものである。

『實用速成廣東語』「凡例」1-2頁

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

以上の行からは、当時の粵語教育者が言う「廣東語」に少なくとも3つの意味が有ったことが分かる。それは、①広州の粵語、②リングフランカとして機能する粵語、③広東省内の諸言語、である。①は（18）と（19）で「標準語」として述べられている。香港の言語体系を粵語の標準とする記述は、第一期の教材ではまだ現れていない。②は（17）の記述から窺われるものであり、特に商業の媒介言語として広く知られていたことが分かる。③は（19）の冒頭で述べられている。

それ以外には、（18）で「單ニ廣東語ト申シマシテモ嚴格ニ申セバ、二十數種ノ發音ガアル」と述べられている。これが③の意味で用いられたものか、それとも③とも異なる「珠江デルタに分布する方言群」或いは「粵語に属する諸方言」を意図したものかは、判然としない。

#### 4.4. 発音

##### 4.4.1. 発音説明と発音練習

粵語の表記体系は漢字を主とするため、漢字の発音を明示する必要が有る。第一期の教材を対象として、発音の説明を設けているか否かを纏めたものが表4である。発音の説明を設けていない教材は少なくない。そこには唯一の甲類

【表4】発音説明の有無（第一期）

	詳しい発音説明有り	簡単な発音説明有り	発音説明無し
甲類			Ia-12 實用速成廣東語
乙類	Ia-13 廣東語の會話 Ia-14 廣東語入門	Ia-10 廣東語講座	Ia-05 かなつき廣東語會話
丙類	Ia-07 實用廣東語會話	Ia-02 日粵會話 Ia-04 日粵會話讀本 Ia-06 商と兵隊廣東語會話 Ia-08 速成廣東語會話 Ia-09 廣東語新會話	Ia-01 簡易廣東語 Ia-03 廣東語初歩 Ia-11 日本語廣東語會話

の教材である影山巍『實用速成廣東語』も含まれる。また、乙類と丙類の教材は発音説明の有無で分れている。このことは、当時は発音の学習が熟成志向か速成志向かを左右する要素ではなかった可能性を示している。

発音の練習が有した意味に至っては、第一期の教材を根拠に述べるのは難しい。発音練習を設けているのは岡本一雄『廣東語入門』のみだからである。

#### 4.4.2. 発音表記法（声母と韻母）

第一期の教材で発音表記を施しているものは、いずれも仮名表記は用いている。台湾で刊行された臺灣總督府文教局『日粵會話』、長野政来・神田樹『日粵會話讀本』、山下昇『廣東語講座』の仮名表記は臺灣總督府民政局『訂正臺灣十五音字母詳解』（1901年）の表記法に従っている<sup>33</sup>。

張源祥『廣東語の會話』と岡本一雄『廣東語入門』は仮名表記とラテン文字表記を併用している<sup>34</sup>。両書は1942年と44年に刊行されており、第一期後半の教材である。ラテン文字は『廣東語の會話』では本文ではなく欄外に注記されるにとどまっている。『廣東語入門』では一部の語彙に注記されるにとどまっている。第一期ではラテン文字は補助的な役割しか担っていなかったと考えられる。

以下に、仮名表記が粵語音の重要な区別をどの程度まで反映していたかについて論じる。論点は（1）無声無気音と無声有気音、（2）鼻音韻尾 /n/ と /ŋ/、（3）閉鎖音韻尾 /t/ と /k/、である。

##### （1）無声無気音と無声有気音

粵語では破裂音・破擦音声母に無声無気音と無声有気音が現れる。/p/ と /p<sup>h</sup>/、/t/ と /t<sup>h</sup>/などがそれぞれであり、両者は音韻対立を成す。そのため、両者の弁別は学習の要点となる。だが、第一期の教材で両者を区別したものは半数

<sup>33</sup> 『訂正臺灣十五音字母詳解』の定める仮名表記については陳（2002: 21-34）に詳しい。

<sup>34</sup> 『廣東語入門』では仮名には平仮名と片仮名の両方が用いられている。

に満たない。一貫して区別した教材は『日粵會話』『日粵會話讀本』『廣東語講座』『廣東語の會話』『廣東語入門』である。それ以外の教材は部分的にしか区別していないか全く区別していない。

第一期の教材は、無声無気音も無声有気音も基本的に清音の仮名で表記している。この制約の下で、両者の書き分けには以下の4種類が見られる。①有気音声母については「・」を付す、②有気音声母の仮名にコンマを付す、③有気音を平仮名、無気音を片仮名で記す、④有気音の漢字に付す声調符号を黒塗りにする。①を採用しているのは『日粵會話』『日粵會話讀本』『廣東語講座』であるが、これは『訂正臺灣十五音字母詳解』以前の臺灣總督府民政局『臺灣十五音及字母 附八聲符號』（1895年）の仮名表記に源を有する<sup>55</sup>。②を採用しているのは『廣東語入門』であるが、徹底されてはいない。③と④を採用しているのは『廣東語の會話』である。より早くに出現したのは①であり、後から出現したのは②③④である。

## (2) 鼻音韻尾 /n/ と /ŋ/

粵語では鼻音韻尾に /m/、/n/、/ŋ/ の3つが有る。三者は音韻対立を成すため、その弁別は学習の要点となる。この内、両唇鼻音 /m/ については、第一期の教材は全て「ム」で表記し、他の末鼻音と明確に区別している。それとは対照的に、歯茎鼻音 /n/ と軟口蓋鼻音 /ŋ/ を区別した教材は少ない。

区別した教材は『日粵會話』『日粵會話讀本』『廣東語講座』と『廣東語の會話』のみであり、いずれも韻尾 /n/ を「ヌ」、韻尾 /ŋ/ を「ン」で表記している。この規則は『訂正臺灣十五音字母詳解』に源を有する。『訂正臺灣十五音字母詳解』に源を持たない表記法を用いた教材で韻尾 /n/ と韻尾 /ŋ/ を区別しているのは、『廣東語の會話』のみである。一方で、区別していない教材はいずれも両者を共に「ン」で表記しているが、それらの中に『訂正臺灣十五音

<sup>55</sup> 黎明期に属する福屋正男『日粵會話』でもこの方式が用いられている。

【表5】発音表記に関する各教材の状況（第一期。台湾で刊行された教材の書名には下線を加えた）

	分類	声調表記	有気・無気 の 区別	無気音 声母	韻尾 /n/	韻尾 /ŋ/	韻尾 /t/	韻尾 /k/
Ia-01 簡易廣東語	丙	無	無	清仮名	ン	ン	ツ	ツ
Ia-02 <u>日粵會話</u>	丙	点や線	有	清仮名	ヌ	ン	ツ	θ, ク, ツ
Ia-03 廣東語初歩	丙	無	無	清濁仮 名混在	ン	ン	ツ	ツ
Ia-04 <u>日粵會話讀本</u>	丙	点や線	有	清仮名	ヌ	ン	ツ	ツ, ツク
Ia-05 かなつき廣東語 會話	乙	無	無	清濁仮 名混在	ン	ン	ツ	ク
Ia-06 商と兵隊廣東語 會話	丙	無	部分的 に有	清濁仮 名混在	ン	ン	θ, ツ	θ, ツ
Ia-07 實用廣東語會話	丙	無	無	清仮名	ン	ン	θ	θ
Ia-08 速成廣東語會話	丙	無	無	清仮名	ン	ン	θ, ツ	θ, ツ
Ia-09 廣東語新會話	丙	無	部分的 に有	清濁仮 名混在	ン	ン	θ, ツ	θ, ツ
Ia-10 <u>廣東語講座</u>	乙	点や線	有	清仮名	ヌ	ン	ツ	ク
Ia-11 日本語廣東語會 話	丙	無	無	清濁仮 名混在	ン	ン	ツ	θ, ツ
Ia-12 實用速成廣東語	甲	無	有	清濁仮 名混在	ン	ン	θ <sub>(注)</sub>	θ <sub>(注)</sub>
Ia-13 廣東語の會話	乙	圈発	有	清仮名	ヌ	ン	ット	ック
Ia-14 廣東語入門	乙	数字	有	清仮名	ン	ン	ツ	ク, ツク

注) 但し、仮名に記号「」を付すことで閉鎖音韻尾であることを表す。

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

字母詳解』の表記法に従った教材は無い。実は、日本本土で刊行された教材の殆どは韻尾 /n/ と韻尾 /ŋ/ を区別していなかったのである（表5）。

### (3) 閉鎖音韻尾 /t/ と /k/

粵語では閉鎖音韻尾に /p/、/t/、/k/ の3つが有る。三者は音韻対立を成す。しかし、いずれも無開放閉鎖音であるためその聞き分けは難度が高い。この内、両唇閉鎖音 /p/ については、第一期の教材は全て「プ」で表記し、他の韻尾と明確に区別している。それとは対照的に、歯茎閉鎖音 /t/ と軟口蓋閉鎖音 /k/ を区別した教材は半数に満たない。

韻尾 /t/ と韻尾 /k/ の表記上の区別は教材によって少し異なる。『日粵會話』は韻尾 /t/ を「ツ」で記すが、韻尾 /k/ は「ク」「ツ」で記す他に、仮名を当てない箇所も有る。後者の場合、表面上は閉鎖音が現れないかの如く見える。『日粵會話讀本』は韻尾 /t/ を「ツ」で記すが、韻尾 /k/ は「ツク」や「ツ」で記す。『かなつき廣東語會話』は韻尾 /t/ を「ツ」、韻尾 /k/ を「ク」で記す。『廣東語講座』も同じである。『日本語廣東語會話』は韻尾 /t/ を「ツ」で記すが、韻尾 /k/ は「ツ」で記す他に、仮名を当てない箇所も有る。『廣東語の會話』は韻尾 /t/ を「ット」、韻尾 /k/ を「ツク」で記す。『廣東語入門』は韻尾 /t/ を「ツ」、韻尾 /k/ を「ク」や「ツク」で記す。

発音表記について、各教材の状況を纏めたものが表5である。表中の〇は表記しないことを表す。表5からは2つのことが窺える。一つは、台湾で刊行された教材（Ia-02、04、10）と日本本土で刊行された教材（左記のもの以外）とで発音表記についての姿勢が異なることである。もう一つは、甲乙丙という分類と発音表記の精粗の間に明確な相関が認められないことである。

#### 4.4.3. 声調表記

粵語は音節声調を有する。その習得は粵語の学習に於ける最大の要点であると言ってよい。第一期の教材で、声調を何らかの方法で表記しているのは臺灣總督府『日粵會話』、長野政来・神田樹『日粵會話讀本』、山下昇『廣東語講

【表6】声調の呼称と表記（第一期）<sup>36</sup>

	陰平		陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	上陰入	下陰入	陽入
1a-02 日粵會話	上平 □ノ	(上平) □	下平 □ノ	上聲 □ノ		去聲 □ノ		上入 □ノ	下入 □ノ	
1a-04 日粵會話 讀本	上平 □ノ	(上平) □	下平 □ノ	上聲 □ノ		去聲 □ノ		上入 □ノ	下入 □ノ	
1a-10 廣東語 講座	一聲 上平 □ノ	十聲 中平 □ノ	五聲 下平 □ノ	二聲 上上 □ノ	六聲 下下 □ノ	三聲 上去 □ノ	七聲 下去 □ノ	四聲 上入 □ノ	九聲 中入 □ノ	八聲 下入 □ノ
1a-13 廣東語の 會話	上平 。□		下平 。□	上聲 。□		去聲 。□		上入 。□	中入 。□	下入 。□
1a-14 廣東語 入門	上平 <sup>1</sup> □	下平 <sub>1</sub> □	上上 <sup>2</sup> □	下上 <sub>2</sub> □	上去 <sup>3</sup> □	下去 <sub>3</sub> □	上入 <sup>4</sup> □	中入 。□	下入 <sub>4</sub> □	

座』、張源祥『廣東語の會話』、岡本一雄『廣東語入門』のみである。

声調の表記法としては以下の3種類が見られる。①点や線、②圈発、③数字。『日粵會話』『日粵會話讀本』『廣東語講座』は点や線、『廣東語の會話』は圈発、『廣東語入門』は数字を用いている。表6は声調表記法を対照したものである。□は声調符号が付される文字（漢字・仮名・ラテン文字）を表す。

注目すべきことは以下の3点である。第一に、『日粵會話讀本』の声調表記法は『日粵會話』と全く同じであり、『廣東語講座』の表記法も『日粵會話』のものを発展させたものであることである。台湾で刊行された三書は基本的に同じ声調表記法を用いていることになる。この表記法は臺灣総督府民政局『臺灣十五音及字母附八聲符號』（1895年）の「八聲符號」にその源を有する。日

<sup>36</sup> 『廣東語入門』は表中に掲げた呼称よりも以下の呼称を多用している。上第一聲、下第一聲、上第二聲、下第二聲、上第三聲、下第三聲、上第四聲、中聲、下第四聲。

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

本統治期の台湾では、台湾語（閩南語）と客家語は言うに及ばず、日本語話者向けの閩語教材——『實用日汕語捷徑』（1920年）、『海南語初歩』（1922年）、『日閩會話』（1938年）など——でも使用された<sup>37</sup>。第二に、日本本土で刊行された『廣東語の會話』と『廣東語入門』の声調表記法は、欧米人の著述で用いられた表記法に源を有することである。圈発を用いた表記法は、19世紀中期にブリッジマン（Elijah Coleman Bridgman）が『A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect』（1839年）で用いて以来、広く用いられてきた。一方で、数字（但し中入に対しては圈発由来の記号「。」）を用いる表記法は、管見に於いてオーバザック（Louis Aubazac）の辞典『Dictionnaire francais-cantonais』（1902年）に使用が始まる。第三は、声調表記を施した教材は先に台湾で現れており、日本本土で現れるのは遅れたことである。『廣東語の會話』と『廣東語入門』は第一期後半の教材である。しかも、日本本土で刊行された教材で声調を表記したのはこの両書のみである。

『日粵會話』と『日粵會話讀本』の記述からは、かつては「超平」とも呼ばれ今日では「High Level Changed Tone」（高平変音）と呼ばれる、高平調で実現する変音現象が存在していたことが分かる<sup>38</sup>。『日粵會話』「第一篇」には以下のように述べられており、『日粵會話讀本』「第一篇」も同様の文言を記している。

(20) 上平調ノ發音法ハ前ニ説明シタ通りデアルガ、中ニハ臺灣語ノ上

---

<sup>37</sup> 本論で取り上げない図書で、この方式を採用したものも有る。例えば、香坂順一・林耀波『廣東語會話典』（東都書籍臺北支店、1943年）。

<sup>38</sup> 今日「高平変音」と呼ばれている変音現象の存在は、遅くとも19世紀末期に一部分の粵語研究者・教育者が気付いていた。1883年に刊行されたボール（James Dyer Ball）の粵語教材『Cantonese Made Easy』初版では陰平の圈発（ $\underset{\cdot}{c}$ ）とアスタリスク（\*）を付すことで明示されている。例えば、「 $\underset{\cdot}{c}$  man \*」で表記されている「文」がそれである（50頁）。

平調ノ様ニ發音サレルモノモアル。夫レニハ臺灣語ノ上平調ノヤウニ符號ヲ附ケナイ。コノ音調ハ高クテ始終平坦デアル。例 詩 雞

『日粵會話』「第一篇」(4-5頁)

筆者が行った調査の結果では、『日粵會話』で声調符号が付されていない漢字は、殆どが陰平や陰去に属する。『日粵會話讀本』で声調符号が付されていない漢字は、殆どが陰平に属する。両書ともに声調符号が付されていない漢字には、例えば以下のものがある(括弧内は両書での初出の頁数)。

(21) 仙(16/15)、鐘(19/18)、蚊(82/37)、龜(82/38)、蝦(133/59)、又(147/65)、錐(153/68)

これらは名詞として用いられる点で共通している。「鐘」などは『廣東語講座』では「十聲」や「中平」という調類を与えられており、高平調で実現する変音現象が当時確実に存在したことが分かる<sup>39)</sup>。

さて、『日粵會話』と『日粵會話讀本』は6声調体系を標榜する。『日粵會話讀本』「第一篇」の冒頭には「粵語(廣州語)ノ音聲ハ從來四聲ト稱スルガ、實ハ六聲デアル」と述べられている。『日粵會話』の発音説明でも同じ文言が用いられているため、『日粵會話讀本』が『日粵會話』の声調認識を踏襲したことが分かる。この6声調体系は大きな問題を2つ抱えている。一つは、平と入については陰陽を分けるが、上と去については陰陽を分けていないことである。もう一つは、陰入を上陰入と下陰入に二分せず、かつ下陰入に属するはず

<sup>39)</sup> 『日粵會話』と『日粵會話讀本』の声調符号からは、今日「High Rising Changed Tone」(高昇変音)と呼ばれているもう一つの変音現象も存在したことが分かる。「白銀(16/15頁)では陽平字「銀」に、「英國話/番話」(66/99頁)では陽去字「話」に上声の符号「く」が付されているのがそれである。

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として  
の漢字に陽入の声調符号が付されていることである。これら2つの特徴はいず  
れも広州や香港の体系には見られない。

上と去について陰陽を分けていない原因として、考えられることは2つ有  
る。一つは、基づいた体系では陰上（上上）と陽上（下上）、陰去（上去）と  
陽去（下去）がそれぞれ異なる調値であったが、著者がその違いに無自覚であ  
った可能性である<sup>④</sup>。『日粵會話』で声調符号が付されていない漢字には陰去  
字が少なくない。例えば以下のものが有る。

(22) 半 (16)、信 (50)、費 (52)、印 (90)、棍 (117)、唱 (121)

然るに、陽去字は殆ど含まれていない。これなどは陰去が陽去と異なる調値で  
実現していたことを暗示しているのかもしれない。また、『日粵會話讀本』の  
本文では、本書「發音」篇での説明に背馳して、陽去字には基本的に陽平字と  
同じ声調符号が付されている。つまり、陰去字と陽去字には基本的に異なる声  
調符号が付されている。この事実は、本書の基づいた体系では陰去と陽去が異  
なる調値で実現していたことを意味している。同様に、「發音」篇での説明に  
背馳して、陽上字でありながら陰去字と同じ声調符号が付されたものも散見さ  
れる。「禮」「野」「你」「吓」などである。これも陰上と陽上が異なる調値で実  
現していたことを物語っている可能性が有る。

もう一つは、「廣州語」と称しながらも、広州ではない粵語の地理的変種の  
干渉を受けた可能性である。上と去について陰陽を分けず、かつ下陰入で実現  
するはずの漢字が陽入で実現する地理的変種は極めて稀有であるが、中山県の  
石岐方言が該当する（趙 1948）。下陰入で現れるはずでありながら『日粵會

---

④ 客家語の多くは6声調体系を呈するため、それを粵語に当てはめて理解した可能  
性も有る。

話』では陽入と同じ声調符号「ˊ」が付されている漢字には、例えば以下のものである。

- (23) 八 (9)、百 (11)、尺 (13)、隔 (21)、國 (34)、法 (34)、察 (34)、約 (42)

実は、『日粵會話』と『日粵會話讀本』では広州や香港の粵語であれば両唇鼻音声母 [m] で実現する漢字、つまり中古音の明母字と微母字に対して、バ行の仮名表記を当てた箇所が散見される。例えば、『日粵會話』67頁では「墨 (バァク)」、『日粵會話讀本』55頁では「帽 (ボウ)」。これなどは本書の依拠した体系が石岐方言のような珠江西岸の地理的変種であったと考えるうえで都合が良い。Chan (1994: 225) によれば、18世紀中期の対音資料『澳門記略』(1751年完成)には明母字と微母字が鼻音を冠した有声破裂音 [mb] で実現したことを示唆する特徴が窺える。

張源祥『廣東語の會話』も上と去について陰陽を分けない声調体系を標榜している。しかし、本書の「序言」ではこれが上と去も陰陽に分れることを事実として認めた上での方便であることが述べられている。

- (24) 詳しく云へば廣東語の聲調は平・上・去が各々上・下に分れるのみならず、入聲の内部が更に上・中・下の三種に分化し合計九聲有るが、斯る細別は困難であるから、本書では實用上の見地から上平・下平・上聲・去聲・上入・中入・下入の七種に區別した。

『廣東語の會話』「序言」4頁

「序言」には本書が既刊の北京語教材『支那語の會話』の内容を粵語に変換したものであることも記されている。それがこの方便の背景に在る可能性は否

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

定できない。第一期の粵語教材の中に北京語教材から影響を受けたものが存在したとすれば、言語体系そのものが北京語（もしくは官話）から影響を受けていたか否かとは別の問題として、重要な意味を有する。

#### 4.5. 文法（機能語と統語法）

第一期の教材で機能語について（日本語訳ではなく）説明を施したものは少ない。一貫して説明を施しているのは江川金五『かなつき廣東語會話』と影山巍『實用速成廣東語』である。統語法について説明を盛り込んだものは皆無に近く<sup>④</sup>、張源祥『廣東語の會話』がその第1章で章題目の直後に公式化した統語法を付記しているのみである。例えば、「何々がどうであるは一般的に○○+□□の形で述べられる」のように。これらの事実からは、当時想定された学習法が、機能語の習得や統語法の理解を軸とする今日の学習法とは大きく異なっていたと推測される<sup>⑤</sup>。

#### 4.6. 会話

第一期の教材に普遍的に現れる会話表現は、挨拶表現、指示表現、数量表現、時間表現、金額表現である。これらは実用度の高い表現である。それに加えて、挨拶表現以外は、複合語や名詞句といった学習の基本内容にも関わる。

当時の社会背景を窺わせるのは、多くの教材が軍事会話に一節を割いていることである。以下に数例を挙げる。

---

④ 研究書には統語法の説明を盛り込んだものも有る。例えば、香坂順一『北京語対照 廣東語研究』（東都書籍臺北支店、1943年）。

⑤ 黎明期に属する福屋正男『日粵會話』は「語法篇」で品詞毎に章を立てて機能語の説明を行っているのみならず、統語法の説明も盛り込んでいる。そのため、寧ろ第一期の教材が過度に速成志向であったとも考えられる。

(25) 日本兵唔打中國國民咯。 日本兵は支那の國民は打たない。

日本軍隊保護你喇。 日本の軍隊が貴様を保護してやる。

點解你哋冇抗咗去反日意識呀。 それなのに如何してお前達は抗

日意識を捨てないのか。

中國同日本即喺兄弟一樣。 中國と日本は兄弟と同様である。

『かなつき廣東語會話』(189, 195, 196 頁)

これら「現地人民の敵ではない」「侵攻地の人民を保護する」「中国と日本は兄弟だ」などは定型句であったと思われ、他の教材にも類似する文が見られる。

## 5. 第二期の教材

### 5.1. 各書の構成

#### II-01 藤塚将一『最新廣東語入門書』

英語の書名は『Modern Cantonese Colloquial Primer』。判型は縦 26.0 cm、横 18.1 cm。自序 1 頁、本文 370 頁。但し、自序の直後にノンブルの無い目次が 8 頁分有る。また、巻末に音節表である「廣東語全音表」1 枚と勘誤表 1 枚が挿入されている。

本文は第一篇「基礎知識」(1-25 頁)、第二篇「基礎會話」(26-107 頁)、第三篇「語尾詞用法」(107-120 頁)、第四篇「常用字用法」(121-162 頁)、第五篇「語法會話」(162-202 頁)、第六篇「實用會話」(202-250 頁)<sup>④</sup>、第七篇「日用單語」(251-370 頁)から成る。「基礎知識」は「南支の民族」から「四聲」までの 5 つの部分から成る。その中の 2「現代廣東語」(6-8 頁)では粵語の歴史と標準が語られており、4「發音」(11-20 頁)では詳細な発音説明が施されている。「基礎會話」は「數」から「時の助動詞」までの 26 類、「語尾詞

<sup>④</sup> 目次のみならず本文 202 頁でも旧字体ではなく「會」が用いられている。

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

用法」は「呢」から「㗎」までの11類、「常用字用法」は「吓」から「搵」までの31類、「語法會話」は「勞力受授用語」から「嘍、抑或」までの21類、「實用會話」は「買物」から「散語」までの15類、語彙集たる「日用單語」は「飲食」から「軍事單語」までの29類から成る。「基礎會話」から「實用會話」までの各篇各類では、文例とその日本語訳を列挙し、末尾に簡単な注釈を付す。その中の「基礎會話」から「常用字用法」までは機能語を中心とした常用語の学習、「語法會話」は文法項目の学習、「實用會話」は場面毎の会話の学習となっている。

本文の構造は以下のとおりである。

(26) [基礎知識]

└─ (南支の民族) …… (四聲)

[基礎會話]

└─ (數) …… (時の助動詞)

……

[日用單語]

└─ (飲食) …… (軍事單語)

尚、本書では発音表記に仮名とラテン文字が用いられている。「基礎知識」と「日用單語」の両篇では両者が併記されているが、「基礎會話」から「實用會話」までの各篇では文例に対しては仮名が、注釈ではラテン文字が用いられている。

II-02 藤塚将一『廣東語入門書』

判型は縦21.3 cm、横14.9 cm。「引言」と目次を合わせて10頁、本文474頁<sup>44)</sup>。

本文の構成と内容は『最新廣東語入門書』と基本的に同じである<sup>45)</sup>。『最新

『廣東語入門書』で各類とも末尾に付されていた語釈が、本書では起首に置かれている点のみが異なる。本文の構造も『最新廣東語入門書』と同じである。

### II-03 藤塚将一『廣東語速成』

判型は縦 10.5 cm、横 4.9 cm。説明、目次、本文を合わせて 190 頁。

本文は「五十音羅馬字対照表」(14-17 頁)、「発音」(18-25 頁)、「入門会話」(26-33 頁)、「簡易問答」(34-48 頁)、「短句集」(49-69 頁)、「会話」(70-108 頁)、「単語」(109-190 頁) から成る。「発音」は「音尾のプツクの区別」から「唇歯音と側音」までの 7 項目から成る。「簡易問答」は対話形式の文例を列挙する。「短句集」は等位接続詞「同」から疑問詞「點解」まで 29 類から成り、これら機能語を用いた文例を列挙する。「会話」は「買物」から「挨拶」までの 12 類から成る。「単語」は「数詞」から「天文、地理」までの 17 類から成る。

本文の構造は以下のとおりである。

#### (27) [発音]

└─ (音尾のプツクの区別) …… (唇歯音と側音)

[入門会話]

……

[単語]

└─ (数詞) …… (天文、地理)

### II-04 金丸邦三『広東語会話練習帳』

判型は縦 17.3 cm、横 10.3 cm。「はしがき」「発音記号の説明」などを合わ

---

④ 1970年10月1日発行の改訂版(後の版の奥付では第2版と記される版)では、巻末に24頁から成る「広東語全音表」が加わる。

⑤ 但し、第五篇「語法會話」は「語法會語」と記す。

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として  
せて10頁、本文108頁。但し、104-108頁は「附録」の語彙集である。

本文は「日常挨拶」（2-19頁）、「旅行」（20-39頁）、「宿」（40-53頁）、「飲食」（54-61頁）、「見物」（62-71頁）、「買物」（72-87頁）、「通信」（88-93頁）、「医療」（94-99頁）、「銀行」（100-103頁）の9つの部分から成る。各部分とも起首に単語を配し、その後に文例を列挙する。「附録」は「数詞」から「社会」までの11類から成る。

「附録」を除いた本文の構造は以下のとおりであり、階層を成していない。

- (28) [日常挨拶]
- [旅行]
- ……
- [銀行]

尚、本書では漢字は中華人民共和国の正字体である簡体字（簡化字）で記されている。

## 5.2. 説明の有無と階層化の有無

説明の有無と階層化の有無に基づいて第二期の教材を分類すると、表7のとおりである。第二期には甲類の教材は現れておらず、乙類の教材も1点のみで

【表7】説明の有無と階層化の有無に基づく粵語教材の分類（第二期）

	階層化が高度 (階層数3)	階層化が低度 (階層数2)	階層化無し (階層数1)
甲類			
乙類		II-01 最新廣東語入門書	
丙類		II-02 廣東語入門書 II-03 廣東語速成	II-04 広東語会話練習帳

ある。

### 5.3. 反映する言語体系について

目標言語たる粵語の標準について、藤塚将一『最新廣東語入門書』は「廣東語の標準となる語は勿論廣東市の言語である」(7頁)と述べ、『廣東語入門書』(6頁)でも同様のことを述べている。

しかし、第二期の教材には注意すべき点がある。『最新廣東語入門書』の自序には「本稿は現地に於て兵馬倥傯の間にまとめたもの」と記されている。藤塚将一氏は南支那派遣軍附陸軍文官であった。このことから、同氏の教材の言語データは、第二次世界大戦終了以前に広東や香港で収集されたものと考えられる。教材が刊行されたのは20世紀後半であるが、語例や文例に反映する言語特徴は20世紀前半のものであろう。それに加えて、『廣東語入門書』では鄭兆麟氏が校閲を行っている。鄭兆麟氏は第一期に於いて教材を数点著しており、その言語体系もまた20世紀前半の体系と考えねばならない。よって、第二期の教材の多くは同時期の言語体系を反映していない可能性が高い。

この可能性は、刊行年が僅か数年しか前後しない藤塚将一『廣東語入門書』と金丸邦三『広東語会話練習帳』との間で、特徴的語彙に違いが見られることから示唆される。表8に技能会得を表す助動詞と完了相のアスペクト助詞の語形を掲げる。

技能会得を表す助動詞については、第一期の教材では「會」/wui/もしくはその異体字「噲」が主流であるが、より古い形式「曉」/hiu/が現れる教材も有る。『最新廣東語入門書』と『廣東語入門書』は「會」のみが現れる点で第一期の多くの教材と特徴を同じくする。これに対して、『広東語会話練習帳』ではそれ以前の日本で刊行された教材には現れない「識」/sik/のみが現れ

---

④6 「识」は「識」の簡体字。

【表 8】技能会得を表す助動詞と完了相のアスペクト助詞の語形（第一期から第三期）

	助動詞 (技能会得)	アスペクト助詞 (完了相)
Ia-05 かなつき廣東語會話	噲, 曉	咗, 曉
Ia-10 廣東語講座	噲	咗, 嘍, 曉
II-01 最新廣東語入門書	會	咗, 曉
II-02 廣東語入門書	會	咗, 曉
II-04 広東語会話練習帳	识 <sup>46</sup>	咗
III-01 広東語四週間	識	咗

る。これは第三期の教材と同じである。

完了相のアスペクト助詞については、第一期の教材では「咗」「咗」「嘍」で表される /tsɔ/ が主流であるが、より古い形式「曉」/hiu/ が現れる教材もある。『最新廣東語入門書』と『廣東語入門書』は「曉」が現れる点で第一期の少なからざる教材と特徴を同じくする。これに対して、『広東語会話練習帳』では「曉」は現れず、「咗」のみが現れる。これは第三期の教材と同じである。

第二期の教材は、『広東語会話練習帳』を除き、同時期の言語体系を反映していないと考えられるが、このことは1950年代及び60年代の粵語の特徴を窺い知るための資料として日本語話者向けの教材に大きな限界が有ることを物語っている。

## 5.4. 発音

### 5.4.1. 発音表記法（声母と韻母）

第二期の教材ではいずれも発音説明が盛り込まれている。発音表記にはラテン文字や国際音声記号が用いられるようになる。

『最新廣東語入門書』では表音のために仮名とラテン文字が併用されている。仮名表記に見られる特徴としては、無声無気音を一律に濁音の仮名で表記

している点が挙げられる。声母について無声無気音と無声有気音を区別する教材は第一期にも存在したが、それらは基本的に両者に対して共に清音の仮名を用いていた。部分的に濁音の仮名を用いた教材も存在したが、一律に濁音の仮名で表記する教材は管見に於いて本書が最初である。『廣東語入門書』では「萬國音標文字」と称する国際音声記号が用いられ、仮名は用いられていない。この「萬國音標文字」は黄錫凌が『粵音韻彙』（1940年）で用いた音標を基に微調整を加えたものであり、基本的には同じ表記法であると言ってよい。『廣東語速成』では仮名のみが用いられており、『最新廣東語入門書』と同様に無声無気音を一律に濁音の仮名で表記している。『廣東語会話練習帳』には仮名による表音は無く、漢語拼音方案を意識した独自のラテン文字表記法が用いられている。

#### 5.4.2. 声調表記

第二期の教材で声調を表記しているものは『最新廣東語入門書』『廣東語入門書』『廣東語会話練習帳』である。『最新廣東語入門書』は数字を綴字の右上もしくは右下に付す。入声について上陰入は陰平、下陰入は陰去、陽入は陽平とそれぞれ同じ数字が与えられている。『廣東語入門書』は線を綴字の右上もしくは右下に付す。これは『粵音韻彙』の方式と同類である。但し、陽入について『粵音韻彙』は陽去と同じ線を付すのに対し、『廣東語入門書』は陽平と同じ線を付している。また、陰上と陽上に付す線の形が両書では異なる。『廣東語会話練習帳』はアクセントをはじめとする補助記号を綴字の母音字の直上に付す。上陰入は陰平、下陰入は陰去、陽入は陽去と同じ補助記号を付す。表9に『粵音韻彙』と『最新廣東語入門書』『廣東語入門書』『廣東語会話練習帳』の表記法を対照する。表中の□は声調符号が付されるラテン文字の綴字、aは母音字を表す。

【表 9】声調の呼称と表記法（第二期）

	陰平	陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	上陰入	下陰入	陽入
粵音韻彙	高平 ┌□	低平 └□	高上 ∧□	低上 ∨□	高去 ┐□	低去 ┑□	高入 ┌□	中入 ┐□	低入 ┑□
II-01	上平 □ <sup>1</sup>	下平 □ <sub>1</sub>	上上 □ <sup>2</sup>	下上 □ <sub>2</sub>	上去 □ <sup>3</sup>	下去 □ <sub>3</sub>	上入 □ <sup>1</sup>	中入 □ <sup>3</sup>	下入 □ <sub>1</sub>
II-02	上平 □ <sup>1</sup>	下平 □ <sub>1</sub>	上上 □ <sup>v</sup>	下上 □ <sub>v</sub>	上去 □ <sup>-</sup>	下去 □ <sub>-</sub>	上入 □ <sup>1</sup>	中入 □ <sup>-</sup>	下入 □ <sub>1</sub>
II-03	高平声 a	低平声 ā	高上声 á	低上声 ǎ	高去声 à	低去声 â	高入声 a(p,t,k)	中入声 à(p,t,k)	低入声 â(p,t,k)

## 6. 第三期の教材

### 6.1. 構成

第三期の教材は大変多い。熟成志向の教材も多く、少なくとも以下の各書は甲類に該当する。中嶋幹起『広東語四週間』（1981年）、辻伸久『教養のための広東語』（1992年）、千鳥英一『初めて学ぶ広東語』（1993年）、千鳥英一『エクスプレス広東語』（1994年）、千鳥英一『香港に行こう！広東語旅行会話』（1996年）、陳敏儀『語学王 広東語』（1997年）、吉川雅之『広東語初級教材 香港粵語 [基礎文法 I]』（2004年）、鄧超英『広東語レッスン初級 1』（2005年）、鄧超英『広東語レッスン初級 2』（2005年）、張淑儀・上神忠彦『身につく広東語講座』（2010年）、飯田真紀『ニューエクスプレス 広東語』（2010年）、吉川雅之『広東語初級教材 香港粵語 [基礎会話]』（2012年）。

第三期の甲類の共通点は、多数の課から成ることである。課が基本ユニットを成している。各課は概して頁数が均等である。盛り込まれた言語データは第1課では少ないものの、課が進むにつれ徐々に増す。それでも、各課を構成する要素は基本的に同一である。この均質な「課」は、学習進度の予測や把握といった学習管理に適している。カリキュラムと学習進度を同期させ易いという長所も有ると思われる。

【表10】 課の構成要素とその配列順序（第三期甲類）

	配列順序
III-01 広東語四週間	基本文例→語彙→説明→応用文例
III-11 教養のための広東語	会話→文法説明→練習
III-13 初めて学ぶ広東語	文例→会話→文法説明→補充語彙→練習
III-15 エクスプレス広東語	会話→文法説明（→練習）
III-17 香港に行こう！広東語旅行会話	会話→文法説明→練習
III-21 語学王 広東語	会話→用語法→関連表現
III-31 香港粵語 [基礎文法Ⅰ]	文例→文法説明→応用事項→練習
III-35 広東語レッスン初級1	文例→補充語彙→文法説明→練習
III-38 身につく広東語講座	会話→発音確認→文法説明→練習→応用事項
III-39 ニューエクスプレス 広東語	会話→文法説明（→練習/補充語彙）
III-42 香港粵語 [基礎会話]	基礎知識→会話→文法説明→作文練習→置き換え練習

課を構成する要素としては、①会話、②文例、③文法説明、④関連表現、⑤補充語彙、⑥練習問題が多く見られる。3ないし4要素から成る教材が多数を占めるのに対し、6要素以上から構成される課は殆ど見当たらない。表10は第三期の甲類の教材について、課を構成する要素の配列順序を表に纏めたものである。丸括弧は全課に共通して設けられているわけではないことを表す。

## 6.2. 目標言語の標準について

第三期の教材を比較すると、粵語の標準についての認識が変化する様子が窺える。1980年代には広州方言を標準と定義する教材のみが見られた。中嶋幹起『広東語四週間』と千島英一『香港広東語会話』は巻頭の序文で「広州方言」と定義する。1990年代に入ると認識の変化が顕在化する。辻伸久『教養のための広東語』（1992年）は序言で「広東語は、中国広東省広州市および現

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として  
英領香港の両都市における口語を標準型とする」と述べている。管見に於いて、香港の粵語を粵語の（代表ではなく）標準に列すると明言した教材はこれが最初である。その後、1990年代中期に香港人陳敏儀や郭素霞による教材が登場したことで、香港の形式に基づく趨勢が決まった。2000年代には多数の教材が香港の粵語に基づいている。依然として広州の粵語に基づいているのは広州出身者の手に成る教材のみである。

### 6.3. 発音

第三期の教材ではラテン文字表記が浸透し、仮名表記が衰退した。仮名表記を施していない教材は多い。これに対して、ラテン文字表記は甲類と乙類の殆どの教材に設けられている。但し、表記法は一様ではない。甲類のみを対象に分類すると以下のとおりである

イェール式：『広東語四週間』『教養のための広東語』『語学王 広東語』

イェール式に源を有する方式：『広東語レッスン初級1』『広東語レッスン初級2』

イェール式と香港教育学院式の併記：『広東語初級教材香港粵語 [基礎文法 I]』『広東語初級教材 香港粵語 [基礎会話]』

千島式：『初めて学ぶ広東語』『エクスプレス広東語』『香港に行こう！広東語旅行会話』『身につく広東語講座』『ニューエクスプレス広東語』

この状況は、声調表記ではhやアクセサンを用いたもの（イェール式）と数字を用いたもの（香港教育学院式や千島式）が拮抗していることを意味する。

### 6.4. 文法（機能語と統語法）

第三期の教材には文法に関して、幾つの特徴が見られる。

第一に、機能語に対する説明とその練習問題を設けるスタイルが定着したこ

とである。説明は徐々に詳細さを増した。練習問題は粵語和訳、和文粵訳、粵語作文が多い。練習問題は特に教材を授業で用いる場合に有用であり、第三期の教材が授業での使用と切り離せないものとなっていることが窺える。

第二に、第三期の途中からは文法説明に際して統語法を図式で明示する教材が現れたことである。その萌芽は、陳敏儀『語学王 広東語』(23, 114-115 頁)と郭素霞『はじめての広東語』(44, 46, 102-103 頁)に見られる。粵語は文法範疇に応じた形態変化が無いため、必然的に語順が重要である。説明に際して視覚面に訴える手段を採用したことは大きな進歩であった。

第三に、新出語彙に逐一品詞を付記する教材が現れたことである<sup>47</sup>。第三期最初の教材である中嶋幹起『広東語四週間』では新出語彙に逐一品詞を付記している。付記する教材はその後長らく現れなかったが、吉川雅之『広東語中級教材 香港粵語 [応用会話]』(2003 年)と『広東語初級教材 香港粵語 [基礎文法 I]』(2004 年)で再度実現した。その後、付記した教材が鄧超英『広東語レッスン初級 1』『広東語レッスン初級 2』、張淑儀・上神忠彦『身につく広東語講座』と続く。品詞の付記は、教材の質を高めるという観点から必要な工夫であると思われる。

## 7. 特徴的語彙の文字表記について

本節では第一期と第二期、および第三期(1980年代のみに限定)の教材を基礎資料として、20世紀の日本で粵語に特徴的な語彙がどのように表記されたかを俯瞰する。粵語に特徴的な語彙の表記では新造字が用いられることも少なくないが、19世紀の欧文資料に基づいた簡単な調査では、珠江デルタ社会に於ける新造字の定着には差があったことが示唆されている(吉川 2022b:

---

<sup>47</sup> 品詞という観念は黎明期に属する福屋正男『日粵會話』に既にはっきりと現れており、品詞毎に重要語が説明されている。また、第一期の教材でも品詞毎に語彙を纏めたものは有る。

24)。

筆者が日本で刊行された教材を調査した結果では、第一期と第二期の全教材の半数以上で出現する特徴的語彙の内、出現する全ての教材で同一の字体で表記されているものは、「佢」（人称代名詞。彼）、「呢」（指示詞。これ）、「乜」（疑問詞。何）。「瞓」（動詞。寝る）、「啱」（形容詞。合っている）、「唔」（否定詞。～しない）、「嘅」（構造助詞。～の）など少数に過ぎない。特徴的語彙の多数については教材間で字体差が見られる。表 11 に調査結果の一部分を示す。調査対象には Ib や Ic に属する教材も含めた。

表 11 からは幾つかのことが窺える。第一に、全ての教材で字体が一致しているわけではないが、字体の選択肢は少数に限られていることである。例えば、名詞「物」は「野」「嘢」、動詞「無い」は「冇」「無」のいずれかで表記されている。第二に、第三期には字体差は収束へと向かい、字体の固定化が進んだことである。第一期のみに出現した字体は①「左」「咗」「啗」、②「個」、③「便」、⑤「無」、⑥「卑」「俾」「捩」、⑦「呼」、⑧「蚊」と多いのに対し、第三期で初めて出現した字体は⑧「蚊」のみである。第三に、今日の香港で広く使用されている字体の中に、教材での定着が遅かったものが含まれていることである。⑧「蚊」はその一例である。第四に、特徴的語彙の字体の組み合わせによって時期を特定することができる場合があることである。例えば、①「咗」、②「啗」、④「嘢」、⑥「俾」もしくは「捩」、⑦「平」という組み合わせは第三期に特有である。

## 8. 今後の課題

本論では日本国内で刊行された粵語教材を基礎資料として、その構成、発音表記などを比較し、3つの時期に分けて史的発展を概観した。第 4、5、6 節では幾つかの重要な知見が得られた。第一に、第一期と第二期では説明を施さない丙類の教材が大多数を占めたが、第三期には本文で詳細な説明を施した甲類

【表11】 粵語に特徴的な語彙の表記 (①アスペクト助詞 (完了相)、②指示詞 (遠称)、③指示詞 (不定称)、④名詞「物」、⑤動詞「無い」、⑥動詞「与える」、⑦形容詞「安価である」、⑧貨幣単位「ドル・円」を表す量詞)

	① tsɔ	② kɔ	③ pin	④ jɛ	⑤ mou	⑥ pei	⑦ p <sup>h</sup> ɛŋ	⑧ men
Ia-01 簡易廣東語	嘍	嗰	便	野	無	俾	呼	釵
Ia-02 日粵會話	咗	嗰	邊	野, 嘢	冇	俾	平	文
Ia-03 廣東語初歩	咗	嗰	邊	嘢	冇	俾	平	釵
Ia-04 日粵會話讀本	咗	個, 嗰	邊	嘢	冇	俾	平	咗
Ia-05 かなつき廣東語會話	咗	個, 嗰	邊	野	冇	俾	平	釵, 釵
Ia-06 商と兵隊廣東語會話	左	個		野	冇		平	釵
Ia-08 速成廣東語會話	左	個	邊	野	冇		平	釵
Ib-01 北京語と廣東語	左	個	邊	野	冇	俾	平	文
Ia-09 廣東語新會話	左	個	邊	野	冇	界	平	釵
Ic-01 廣東語會話	嘍	嗰	便	野	無	俾	呼	釵
Ic-02 新廣東語教科書第一冊	嘍	嗰	便	嘢	無	卑	呼	釵
Ic-03 廣東語研究 (上卷)	咗, 嘍	嗰	邊	野	冇	俾	平	文
Ia-10 廣東語講座 (上卷)	咗, 嘍	嗰	邊	野	冇	俾	平	文
Ia-11 日本語廣東語會話		個, 嗰	便, 邊	野	冇	俾, 啤	呼	釵
Ia-12 實用速成廣東語	咗	嗰	邊	嘢	冇	俾	呼	釵
Ia-13 廣東語の會話	咗	嗰	邊	嘢	冇	俾	平	咗
Ib-03 南支華僑會話要訣	咗	個, 嗰	邊	野	冇	俾	平	文
Ib-04 趣味の支那語	咗	嗰	便, 邊	嘢	冇	俾	呼	釵
Ic-04 廣東語教科書(1)	左, 咗	個	邊	野, 嘢	冇, 無			
Ia-14 廣東語入門		嗰	邊	野	冇	俾	平	文
II-01 最新廣東語入門書	咗	嗰	邊	野	冇	界	平	釵
II-02 廣東語入門書	咗	嗰	辺	野	冇	界	平	釵

粵語（広東語）教材史概観——日本国内刊行の市販教材を対象として

	① tsɔ	② kɔ	③ pin	④ jɛ	⑤ mou	⑥ pei	⑦ p <sup>h</sup> ɛŋ	⑧ men
II-03 広東語速成	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ	ㄥ	ㄇ
II-04 広東語会話練習帳	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ		ㄇ
III-01 広東語四週間	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ	ㄥ	ㄇ
III-02 すぐに役立つ広東語会話	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ	ㄥ	ㄇ
III-03 トラベル香港・広東語会話手帳	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ	ㄥ	ㄇ
III-04 実用広東語会話	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ	ㄥ	ㄇ
III-06 香港広東語会話	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ	ㄥ	ㄇ
III-07 香港街を楽しむガイドと広東語会話	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ	ㄥ	ㄇ
III-08 SS 式すぐに話せる！広東語 [Index]	ㄗ	ㄎ	ㄆ	ㄚ	ㄇ	ㄟ	ㄥ	ㄇ

の教材が少なからず現れた。第二に、第一期とは異なり第三期では「課」をユニットとした教材が多く現れた。第三に、3つの時期を通して発音表記法は多様である。第四に、第一期について台湾で刊行された教材と日本本土で刊行された教材とでは発音表記についての姿勢が異なる。第五に、第一期では甲乙丙という分類と発音表記の精粗の間にはあまり明確な相関が認められない。第六に、第三期には練習問題、統語法、品詞に関する工夫が試みられた。

第7節では、粵語に特徴的な語彙が教材でどのように文字表記されてきたかについて、調査結果の一部分を示した。粵語に特徴的な語彙は、日本国内で刊行された教材同士であっても字体が必ずしも一致していたわけではないが、第三期には字体は統一へと向かった。

今後試みるべき考察は幾つも有ると思われる。個々の教材について語例や文例を詳細に考察することはもとより重要であるが、広州や香港、更には海外で刊行された教材と比較して考察することも重要であろう。これは日本国内刊行

の教材を相対化するという試みでもある。例えば、広州や香港の体系が粵語の標準である以上、日本を含む外国で刊行された教材に反映する言語変化は広州や香港での変化に遅れて進行すると予想されるが、広州や香港で刊行された教材と日本を含む外国で刊行された教材とを時系列に沿って比較することで、その一端が明らかになると期待される。また、第7節で示した特徴的語彙の字体についても、日本独特の現象であるか否かを明らかにすることができると思われる。

粵語教材という範囲を超えて、日本に於ける漢語教材全体、更には外国語教材全体の展開まで視野に入れることも必要である。残念ながら、本論はそこまで至っていない。粵語教材で用いられた諸々の様式が他言語の教材で試みられた様式に源を有する可能性は十分に有ろう。また、シリーズとして編集された教材の場合は、シリーズ全体の編集方針が大きく影響する。教材の構成は、決して本論で指摘した原因とのみ関連を有するわけではない。このことは強調しておきたい。

〔鳴謝〕本論の第1節から第6節までは、2021年5月14日に香港理工大学主催で開催された国際会議 The First International Symposium on Teaching Standard Chinese and Cantonese as a Second Language in Higher Education (TCC-SL): Curriculum Design, Pedagogy and Assessment での基調講演「回顧粵語教材的發展軌跡——以日本出版的教科書為例」の内容を發展させたものです。その場で有益な助言をくださった方々に感謝申し上げます。第7節はその後加筆したものであり、JSPS 科研費 21K18357「現代香港と台湾における固有言語の書記言語化プロセスとメカニズムの解明」の研究成果の一部分です。また、基礎資料の閲覧では東京大学東洋文化研究所図書室と駒場図書館にお世話になりました。心からお礼申し上げます。

参考文献（本論の本文や脚注で書誌情報を掲げたものを除く）

- 安重龜三郎. 1920. 『實用日汕語捷徑』. 臺北：汕頭東瀛學校.
- 黃錫凌. 1940. 『粵音韻彙』. [廣州]：中華書局.
- 鄭全福. 1868. 『字典集成』. 香港：De Souza.
- 臺灣總督官房調査課（編）. 1922. 『海南語初歩』. [臺北]：臺灣總督官房調査課.
- 臺灣總督府文教局學務課（編）. 1938. 『日閩會話』. 臺北：臺灣總督府文教局.
- 臺灣總督府民政局學務課. 1901 『訂正臺灣十五音字母詳解』 [臺北]：臺灣總督府民政部學務課.
- 臺灣總督府民政局學務部. 1895. 『臺灣十五音及字母 附八聲符號』. [臺北]：臺灣總督府民政局學務部.
- 田上智宜. 2007. 「「客人」から客家へ—エスニック・アイデンティティーの形成と変容—」, 『日本台湾学会報』9：155-176.
- 趙元任. 1948. 「中山方言」, 『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』20 上冊：49-73.
- 陳君慧. 2002. 「『訂正台灣十五音字母詳解』音系研究」. 高雄：國立中山大學修士論文.
- 天理大学中國語学科研究室（編）. 1952. 『日本現存粵語研究書目（稿）』. [天理]：天理大学中國語学科研究室.
- 馬之壽. 2010. 「『粵東俗字便蒙解』の紹介」, 『開篇』29：90-104.
- 馬之壽. 2021. 「『日粵會話』とその音注表記」, 早稲田大学日本語学会（編）『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集 第1冊—言葉のしくみ』ひつじ書房. pp. 31-48.
- 波多野太郎（編・解題）. 1986. 『中国語学資料叢刊 第四篇 尺牘・方言研究篇』. 東京：不二出版.
- 波多野太郎（編・解題）. 1987. 『中国語学資料叢刊 第五篇 公文研究・日語中譯・聲音研究篇・補遺』. 東京：不二出版.
- 彭馨平. 2017. 「日治時期台灣的客語教材研究—以《廣東語集成》為例」. 台北：國立台灣師範大學修士論文.
- 楊凱榮・吉川雅之・小野秀樹. 2018. 「東京大学教養学部前期課程の中国語教育——軌跡と展望」, 代田智明（監修）, 谷垣真理子・伊藤徳也・岩月純一（編）『戦後日本の中国研究と中国認識：東大駒場と内外の視点』, 風響社. pp. 93-122.
- 吉川雅之. 1997. 「「中文」と「広東語」：香港言語生活への試論（一）」, 『月刊しにか』8(7)：96-103.
- 吉川雅之. 2001. 『香港粵語 [発音]』. 東京：白帝社.

- 吉川雅之. 2009. 「広東語点字の表記法の改定」, 吉川雅之(編)『「読み・書き」から見た香港の転換期: 1960～70年代のメディアと社会』, 明石書店. pp. 135-157.
- 吉川雅之. 2019a. 「言語システムの転換と言語の政治問題化」, 倉田徹(編)『香港の過去・現在・未来——東アジアのフロンティア』, 勉誠出版. pp. 159-172.
- 吉川雅之. 2019b. 「西文資料與近代口語研究——回顧與前瞻」, 『中国語学』266: 1-10.
- 吉川雅之. 2019c. 「西文資料與粵語研究」, 『中国語学』266: 11-29.
- 吉川雅之. 2022a. 「広東語」, 庄司博史(編)『世界の公用語事典』, 丸善出版. pp. 12-15.
- 吉川雅之. 2022b. 「漢語派諸言語の字体新造」, 日本漢字学会(編)『漢字系文字の世界—字体と造字法—』, 花鳥社. pp. 16-41.
- 六角恒廣(編・解題). 1995. 『中国語教本類集成 第五集』. 東京: 不二出版.
- Aubazac, Louis. 1902. *Dictionnaire Français-Cantonnaise* 法粵字典. Hong Kong: Imprimerie de la Société des Missions Étrangères.
- Ball, James Dyer. 1883. *Cantonese Made Easy: A Book of Simple Sentences in the Cantonese Dialect with Free and Literal Translations, and Directions for the Rendering of English Grammatical forms in Chinese*. Hongkong: China Mail Office.
- Bridgman, Elijah Coleman. 1839. *A Chinese chrestomathy in the Canton dialect*. [Canton]: Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China.
- Chan, Marjorie K. M. 1994. Post-stopped Nasals and Lateral Flaps in the Zhongshan (Yue) Dialect: A Study of Mid-eighteenth Century Sino-Portuguese Glossary, In Paul Jen-kuei Li, Chu-Ren Huang, Chih-Chen Jane Tang (eds.), *Chinese Languages and Linguistics. Volume II. Historical Linguistics*. Taipei: Academia Sinica. 203-250.

# A History of Cantonese Teaching Material in Japan

YOSHIKAWA Masayuki

**Abstract:** This paper examines the historical development of Cantonese language education in Japan, through a comparison of teaching material from a synchronic viewpoint. Much Cantonese teaching material has been published for Japanese learners since the early 20th century. While there were two consecutive periods of active publishing, the decades between them were a period of ebb. We investigate the composition and pronunciation notation of the material published in Japan from 1938 to 2012 and Taiwan during the colonial period, especially during the first active period. Additionally, we demonstrate how the unique Cantonese morpheme developed to acquire fixed characters in the teaching materials. Most of the time, many of these morphemes were written with various glyph, even across teaching material published in 20th century Japan.